

〔高井〕第三十号別刷

茶 白 峯

——中世の特遺構を中心として——

中野市草間 茶臼峯遺跡緊急発掘調査団
中 野 市 教 育 委 員 会
昭和四九年一月二〇日（高井三〇号）



茶臼峯砦遠景(左の森安源寺小内八幡社、中央茶臼峯砦跡、右の遠望立ヶ花城跡)



茶臼峯砦土塁の一部(発掘のはじまった北側の土塁)

調査報告書の刊行にあたって

中野市教育委員会

教育長 土屋 忠 男

草間茶臼峯とりで跡遺跡の発掘調査を完了し、ここに調査報告書の刊行をみる事ができました。

この遺跡を調査することになった直接の動機は、中野市はじまって以来最大の公害問題として世間の耳目を集めた西条地区カドミウム汚染田の排客土工事の施行にともない、その採土区域内に存在するこの遺跡の取扱いについて、県教委と協議の結果緊急発掘による記録保存という方法で、世に残すことになったわけであります。

今回の調査は、これまで当地方にほとんど調査例のない中世の特跡であるということであり、この点、他の場合と異ったむずかしさがあったことと思われませんが、先生がたのご努力によって、奥信濃中世史の解明に寄与する貴重な成果をあげ得たことは、主宰者として喜びにたえないところであります。

この調査のためにお忙しい中をお願いした顧問の金井喜久一郎先生、金井汲次先生ならびに調査団長田川幸生先生、各担当の先生をはじめお力添えをいただいた関係各位に深甚なる敬意と感謝の意を表しまして、刊行のことばといたします。

茶 白 峯

— 中世の發遺構を中心として —

中野市草間茶臼峯遺跡緊急發掘調査団

目 次

第一章 環 境

- 第一節 茶臼峯周辺の地形……………青木 広 安…二
茶臼峯周辺の地理的景觀／草間丘陵の地形
- 第二節 茶臼峯周辺の地質……………中 村 二 郎…六
地質概説／茶臼峯遺跡發掘露頭／火山灰層と地形面の關係
- 第三節 茶臼峯の動物と植物……………山 田 拓…二〇
- 第四節 茶臼峯周辺の遺跡分布……………金 井 汲 次…三
- 第五節 茶臼峯發遺跡の史的環境……………金 井 喜久一郎…六
草間台地と草間氏／高梨氏と草間台地／本誓寺と牛出／
大塔合戦と草間大藏／山ノ内の反亂と草間大炊助／
小笠原長時草間氏の館に來る／高梨政頼と草間出羽守／
高梨頼親の遷住／庄内八幡宮と安源寺
- 第六節 茶臼峯・草間氏關係の傳承……………金 井 汲 次…四
茶臼峯發跡について／發遺跡と草間氏等について

第二章 調 査

- 第一節 昭和四八年以前の調査……………田川幸生・山上右八…六
明治・大正時代の調査／信濃史料考古館の調査／
茶臼峯古墳と草間農業跡群の調査／
調査前における遺構の確認
- 第二節 調査発掘の経過……………町 田 佳 久…六
発掘までの経過／調査団の構成／發掘経過
- 第三節 茶臼峯の發遺構……………田川幸生・松沢芳宏…三
馬蹄形土器をめぐるした磐／土器及び土器内のビット／
曲輪状遺構／發遺構の構築／旗塚／發遺構のまとめ
金井文前
- 第四節 磐内出土遺物……………田川幸生・小野沢捷…二
石器・石造品／土器・陶器／金属器・金属品／人骨
田川幸生・榎野長則
村上孝雄
- 第五節 墓跡遺構と遺物……………田川幸生・榎野長則…二
供養塔／火葬墓／家畜骨
- 第六節 須恵器片集積跡……………金 井 正 彦…三
- 第三章 調査のまとめ……………田 川 幸 生…七

第一章 環 境

第一節 茶臼峯周辺の地形

一、茶臼峯周辺の地理的景観

茶臼峯は、中野市の西部を南北にはしる高丘丘陵地帯のうち、南部をしめる草間丘陵にある。この草間丘陵の脊骨の東北端頂上部が土地の人々によって「茶臼峯」とよばれてきている。発掘以前は雑木林であった。

標高が三八五メートル、東側中野平との比高はおよそ三五メートルであるが、長野盆地北部および周辺山地の大パノラマが展望できる。東には中野扇状地が眼下に見くだせる。南は雁田山の山麓にひろがる小布蓋扇状地と延徳沖の後背低湿地帯が一望におさめられる。遊光でなければ遠く、聖山、冠着山もみえる。西は草間丘陵の中央大久保館跡地帯はもとより、西端の立ヶ花城跡、千曲川をはさんで飯綱、黒姫、斑尾、磐の山々が豊野山地の上にもみえる。北方は安源寺、栗林の集落を足もとに、壁田城跡、千曲川をはさんで斑尾山の麓につづく山陵や谷筋が手にとるように眺望できる。

草間丘陵は、第三期の地積地層からなり、それが褶曲運動によって丘陵に形成されたとみられるが、その平面形は、軌形あるいは石廂丁形になっている。丘陵の脊骨は、茶臼峯から日和山へと南にはしり、次第に西へ湾曲して立ヶ花城山で終る。草間氏の居館跡と

いわれる大久保地帯は草間丘陵の中央部にあり、これを北東から南西へと包圍する地形になっている。丘陵の西から北へ千曲川が嵌入して峡谷をつくり、草間丘陵はいわば自然の要塞をなしている。

丘陵の脊骨にそう東側は階段状の断層崖をなし、中野平や延徳沖の後背低湿地帯に対してみごとな山麓線を形づくっている。草間はこの断層崖にそった山麓集落で、湧水や自噴井戸が集落立地の条件である。また古くから丘陵地で畑作を、低湿地で水稲耕作を可能にした。丘陵上の耕地は草間の人々が耕作する。

茶臼峯の北側はやはり断層による急崖をなす。崖下との比高はおよそ二〇米であるが、東側より峻険である。この丘陵地帯の地質は粘土質のため、古くから農業用に採掘されてきたが、昭和二四年以降は水田の客土用に採土作業がすんだ。とくに昭和四七年から行なわれた西条のカドミ汚染水田の土壌の入れ替え工事にもなり大量の採土がはじまって、現在はいっそうの急崖を呈している。崖下を無道豊野線が東西にはしり、これをはさんで高丘小学校のある草間原、その北に栗林、北東に安源寺の集落が立地する。草間原はかつて千曲川の氾濫原であり、浸食段丘とみなされる。現在にはリンゴの一大集団栽培地になっている。栗林の集落が立地する面は、この面をさらに下刻した第二段丘面と考えられる。その比高はおよそ十メートルである。水田とリンゴ畑になっており、それが千曲川にそっ



第2図① 茶臼峯磐壑景 —安源寺側より—
左の森 安源寺八幡社、中央茶臼峯壑、右の遠望立ヶ花城跡



第2図② 茶臼峯磐壑景 —江部側より—
中央の高い頂が茶臼峯壑

て、牛出、立ヶ花の集落が立地する面と同一面を形成している。

西方はゆるい起伏のある傾斜地がつづき、嵌入蛇行する千曲川の狭隘部にのぞんでいる。丘陵内部では浅い樹枝状谷が発達し、地層の間からわく、地下水を利用して「御魂ヶ池」などの溜池がつくられ「池田」とよばれる窪地では水田も耕作されている。丘陵平坦面（傾斜地）では脊梁部に林地が残るほか大半は開墾がすすみ、桃などの果樹園になっている。千曲川沿岸では、立ヶ花城山の部分で千曲川が嵌入するため断崖状を呈すが、立ヶ花の付近では、西側に

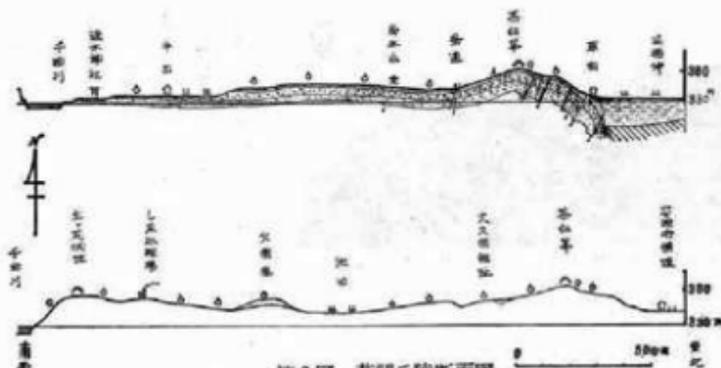
曲流するため滑走斜面を形成しつつある。牛出の速水神社付近ではそれが顕著で、三段目の小段丘もみられ、リングゴ畑になっている。この段で千曲川水面とは七〇メートルである。

二、草間丘陵の地形

褶曲造山された草間丘陵

千曲川に沿って形成されている長野盆地・飯山盆地は、盆地底部に断層線をもつ構造盆地である。これら盆地の東側の山地は、一般に古期の地塊を基盤として、古期第三紀層および安山岩系の火山岩類からなり、安定している。これに対して、西側山地ではフォッサ、マダナ地帯に堆積した新第三紀系の堆積地帯で軟弱な地層であり、不安定である。草間丘陵を含む高丘丘陵は、これら広大な堆積地帯の東縁部にあたる。いわば、安定した東側山地との接触帯である。この地帯が日本海側からの側圧（横圧）を受けて褶曲地帯になっていることは多くの背・向斜構造をもった地層の確認がなされていることよりなすける。

このような西側からの褶曲運動の力が、その東縁接触地帯で東側山地に衝突する。その時、堅固な東側山地は横圧運動の抵抗帯となるから、褶曲帯の東縁部である高丘丘陵地帯の地層が圧縮され、むくれあがったり、へこんだり、あるいは亀裂が生じる。こうして形成されたのが草間丘陵である。県道沿の掘割に褶曲地層が確認できる。



第3図 草間丘陵断面図

断層によって形成された山麓崖

草間丘陵東縁の山麓崖は、盆地底において盆地の東側山地と西側の堆積地層の接触面にあたる構造線にそった破砕帯の衝上作用による露出部であつて、いわば断層による急崖である。茶臼峯を北端とする草間裏山、日和山、城山の脊骨は衝上作用による隆起地形で背斜軸に相当するが、草間集落の立地する山麓崖は、褶曲帯の東縁部が盆地底に向つて押し込まれるように破砕されており、いわゆる逆

断層の様相をもっている。そこが、夜間瀬川や松川の堆積物によつて埋没され、明瞭な山麓線を画している。茶臼峯北側の採土による地層の露出部に、褶曲とこまかい断層がみられる。

草間集落の西部では、集落が並行した二列の路村をなしている。山麓線にびつたりそつた集落と、水田のある一筋の微凹地をはさんで、比高一米ほどの微凸地が並行しており、その上にもう一列の路村が並んでいる。この微凹地には、かつて掘りぬき井戸があつて目撃していたが、近年、鑿井川の排水施設が完備してから地下水位が低下し枯涸したという。これらの微凹凸地は沖積層からなるが、比較的新しい時代になつても、西からの側圧を受けて地層に波状の変動をもたらした地点とみなすことができよう。

褶曲、断層による小丘群と樹枝状谷

草間丘陵東縁が急崖であるのに対して、脊骨の西側は、全体として西に傾斜しながらゆるやかな波状に褶曲し、小規模ながら背斜向地形が形成されている。また、その起伏の間に来た集落と小断層にそつて浸蝕がすすみ、小丘や樹枝状の谷地形が発達しつつある。

褶曲地層は、茶臼峯の脊骨部分の掘り割りや、茶臼峯から県道ぞいに一キロほど西へいった地点の小丘の掘り切りの地層断面によつて、背斜構造をみる事ができる。その間の「御魂ヶ池」から西部水田のある「池田」とよばれる窪地を向斜谷とみなすことが許されるように観察したが、地層の確認はできなかった。これらの背斜向斜地層が、西からの側圧による褶曲作用の結果であるが、その褶曲作用は軟弱な第三紀系の本地域では当然に亀裂や小規模な副次的



第4図 草間丘陵周辺の地形

な断層を生ずる。

一方、地形上からみた断層線はいくつか設定できる。丘陵を支配した断層が脊骨に並行して南北にはしるのに対して、その脊骨を直角に寸断する小断層がある。茶臼峯、草間裏山、日和山、城山をつなぐ段線上の鞍部がそれである。その最大のものが、茶臼峯と安願寺城山との間で、安願寺集落の立地する狭隘部である。鞍部というより陥没地溝帯である。草間丘陵が、高丘丘陵の一連の山系でありながら、この部分で分離されているのは、断層によるものとみなされる。安願寺集落は、この地溝帯を通過する前橋街道と谷街道の交錯する交通の要地として発達した。

また、茶臼峯と草間裏山との鞍部から、火薬庫のある小丘と日和

山との間にある沢を結ぶ線も副次的な断層線とみなされる。これは脊骨が草間の裏山から日和山、城山へと西に向って湾曲した線と並行的である。さらに、茶臼峯の北側崖下、県道ぞいに断層が通過する。それは茶臼峯の北端が三角面を呈すること、高丘丘陵の東縁を南下する断層線が片塩付近から西に向って湾曲して、安願寺坂の崖を形成するが、その延長線とみなすことができるからである。

このようにみえてくると、小断層・亀裂は、造湾曲の時期には無数に出現し、これらが雨水による地表水や地下水の湧出によって、浸蝕され凹凸地形が形成された。大久保地籍の草間氏の馬部跡は一边がおよそ七七八〇米の正方形の台地状になっているが、このような自然の営力によって形成された。茶臼峯も東側と北側が断層で急崖をなし、西側は背斜面になっており、これが自然の要塞として城山に利用されたものである。

千曲川による先行性峡谷と段丘

千曲川は、草間丘陵の西端立ヶ花城山から峡谷をつくって蛇行し、高丘丘陵の北端腰巻橋付近から飯山盆地に流出する。草間丘陵が褶曲作用を受ける以前から、現在とほぼ同じ流路をとっており、中野平側は流れていない。なぜなら、草間側には千曲川の形成する段丘が存在しないのに比して、丘陵の西側では、草間原段丘、牛出、栗林段丘、その下に更に二段ほどの段丘を形成している。段丘を形成していることは、ここを下刻浸蝕しながら侵入したことを物語っている。千曲川の流路が、現在の方向で流れているとき、一定の地質年代的時間間隔をおいて、序々に褶曲作用がはじまって隆起

運動がおこった。千曲川はそれに対応して氾濫と浸蝕をくりかえしながら、いく段かの段丘を下割浸蝕して、現在の地形を形成した。

その際、草間丘陵の東縁部が相対的に高く隆起したために、西においやられて、丘陵側に広い段丘面が形成された。その結果、先史以来の古代人が住みつくにはかっこうな生活舞台を提供することになった。

(青木広安)

参考文献 1 井上春雄「フォッサ・マダナ環曲帯東縁の構造盆地」信州地

理31号

2 中村二郎「安原寺周辺の地形」安原寺遺跡報告書

第二節 茶臼峯周辺の地質

一、地質概説

(一) 大川層

模式地は豊田村上今井より赤塩に通ずる道路である。本層は主に砂岩と礫岩からなるが、泥岩と白色凝灰岩をはさむのが特徴である。砂岩は細粒の中粒であるが、中粒が最も多く、黄灰色・青灰色・灰白色を呈し、軟弱で凝灰質の部分も認められる。礫岩は硬砂岩・粘板岩・珪岩・チャートなど、よく円磨された古生層起源の岩石のほか、広く中央隆起帯に基底層岩として分布する黒色で緻密な安山岩・玢岩・石英閃緑岩などの細粒中粒、まれに人頭大のものから、二メートル前後の安山岩の巨礫もみられる。泥岩は下部ほど多くはさまれ、暗灰色・青灰色、淡褐色を呈し、かなり凝灰質の部分

もあり、ところによっては軽石粒を散在している。

親川付近では、砂岩中に泥岩・重炭の薄層がはさまれている。道光寺付近では二・三メートルの厚さの白色の石英安山岩質凝灰岩が、砂岩・泥岩と互層している。この白色凝灰岩はよく北方へ連続して健層となっている。

本層の一般傾斜は三〇度内外で、道光寺・上今井にわたり、一本の背斜構造と一本の向斜構造を認める。

(二) 屋敷層

模式地は豊田村特佐より古牧にわたる千曲川沿岸である。本層の下限は替佐断層によって大川層と接している。岩相は主として大小不規則な安山岩塊を含み、無層理の凝灰角礫岩からなるが、凝灰岩・砂岩・礫岩などをはさむ。凝灰角礫岩を構成する角礫は暗灰色・赤紫色・黄褐色を呈する複雑な安山岩が最も多いが、長柱状の角閃石を含む灰褐色で粗粒な安山岩もみられる。

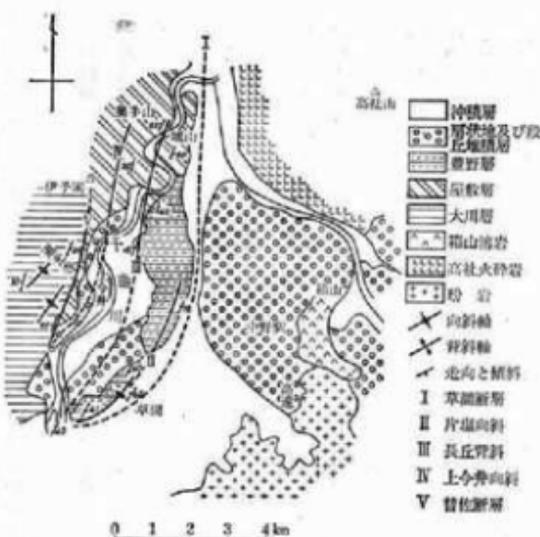
古牧付近では、複雑な安山岩の凝灰角礫岩・火山角礫岩からなるが、一部には黒雲母を含む石英安山岩質の白色・淡灰色の凝灰岩がはさまれている。

鬼坂の千曲川沿岸の段崖では高社火砕岩を構成する安山岩と全く同質な角礫を認める。

(三) 豊野層

模式地は中野市安原寺の採泥場である。本層は下位の屋敷層に整

合に漸移する。下部は淡黄色・灰褐色で、層理のはっきりしない粘土状の泥岩が優勢であるが、上部は細粒・中粒の砂岩または、灰白色の凝灰岩をはさみ、比較的規則正しい層理を示す部分が多くなる。泥岩と砂岩とが溝状の層理を示すところでは、層理面にしばしば茶褐色の酸化帯を認める。砂岩の特徴は、水成の黒雲母片を含み、また凝灰質になるところでは角礫と連角礫の凝岩に漸移する場合が多い。凝岩は安山岩質のものが多く、これにチャート、硬砂岩・流紋岩・粉岩等からなっている。



第5圖 茶臼峯周辺の地質図

中野市し尿処理場南方では、砂岩・泥岩・凝灰岩からなり、この凝灰角凝岩中には、最大五〇センチの砂岩・泥岩の偽円礫を混在している。

一般走向と傾斜は、長丘背斜の東翼の安源寺採泥場でN三〇度E、四〇度S、西翼では中島入口で、N四〇度E、四〇度Wを示すが、草間地域では不規則にもまれ、ときに七〇度／＼八〇度の急傾斜を認める。

本地域の主な褶曲構造としては、一つの背斜構造と二つの向斜構造とがある。このほか一・二の小規模な背斜・向斜が存在する。

長丘背斜：この背斜軸は北端は古牧付近で、千曲川東岸の笠原・大俣をとおり、南端は立ヶ花におよぶ。ほぼN三〇度E方向に走る背斜構造で長丘丘陵の地質構造を支配している。

上今井向斜：この向斜軸は千曲川西岸に沿って長丘背斜軸と並走する向斜構造である。北端は深沢付近から替佐をとおり、南端は上今井におよぶと推定される。本向斜軸は二ツ石付近で後述の替佐断層に切断される。

片塩向斜：この向斜軸は北端は田麦付近で、片塩を通り草間におよぶ。ほぼNE—SW方向に走る向斜構造である。向斜軸の南東翼は片塩では一五度内外の緩傾斜であるが、安源寺付近からその度を増し、草間では六〇度／＼七〇度の急傾斜を示す。

本地域には、主な断層として、替佐断層と草間断層がある。替佐断層：地質構造上推定される断層で、北端は伊予向から替佐・道光寺・二ツ石におよぶ。ほぼNE—SWに走る。替佐はこの断層

の兩端を淺野に達するとしている。この断層は西に向つてやや湾曲した形をしている。また断層に接する大川層はしばしば逆転が認められ、西側に分布する同層と比べて著しくもまれていることなどから西側上りの逆断層と推定される。

草間断層：次の点から断層が推定される。

⊖ 長丘丘陵の東麓は平滑である。しかも河川による側浸食の形跡は全く認められない。

⊕ 一九五三年、草間部落の椀井川沿岸で実施された試錐結果によれば、地下一二〇メートルに至つてはじめて豊野層が認められている。

この断層の性質については、断層線が西に向つて湾曲している。また断層線に近い草間では他の地域に比べて著しくもまれていることなどから、西側上りの逆断層と推定される。

二、茶臼峯遺跡の発掘露頭

発掘地点の露頭は豊野層とそれを被覆する新期ロームⅡ、新期ロームⅠ、表土からなっている。

(一) 豊野層

露頭中、下部三〇—五〇センチは無層理な灰白色凝灰質砂岩で角閃石安山岩の軽石を多く含んでいる。上部四〇—一三〇センチは黄褐色の粘土質泥岩で下部と同様、角閃石安山岩の軽石を斑点状に

包有している。この軽石は風化がすすみ、指先でもぼろぼろに崩壊される。

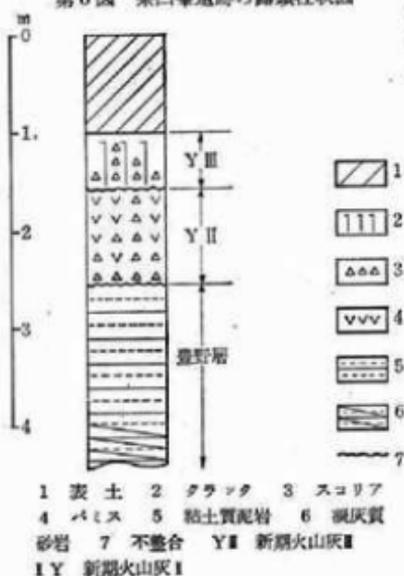
(二) 新期火山灰Ⅱ

層厚は八〇—一〇〇センチで下位の豊野層を不整合に被覆する。本層は赤色のスコリア・パミスを含む、暗褐色—褐色で、細粒なロームである。スコリアは下部に多く、中部から上部にわたってパミスを点在する。

ロームの重鉱物の主成分は輝石類が圧倒的に多く、次いで磁鉄鉱・角閃石などからなる。

以上のことから、このロームは河西地域に発達する新期火山灰Ⅱに対比される。

第6図 茶臼峯遺跡の露頭柱状図



(一) 新期火山灰Ⅱ

層厚は約五〇センチで新期ロームⅡとは軽微な不整合関係を示している。クラックの発達した赤色スコリア混入の茶褐色の粘土質なロームである。

ロームの重鉱物の主成分はシソ輝石・普通輝石・角閃石・磁鉄鉱よりなるが、各成分はそれぞれ二〇パーセントぐらいつつ均等に含まれている。

以上のことから、このロームは河西地域に広く発達する新期火山灰Ⅱに対比される。

三、火山灰層と地形面との関係

千曲川流域を模式地として発達する段丘は高位より赤塩面・長丘面・草間面・高丘面・栗林面の五段に識別される。

(一) 赤塩面

三水村赤塩で代表される面で、海拔高度五〇〇～六〇〇メートルにわたって分布する。基盤の構造を切り、かつての千曲川の自由蛇行浸食によって形成された浸食段丘である。千曲川水面からの比高は、一八〇～二八〇センチで、厚さ数メートルの *Gravel Bank* をのせている。この面上には新期火山灰Ⅰ・Ⅱが被覆している。

※ 新期火山灰Ⅰの模式地は野風湖中学校の校庭の切割である。安山岩角礫を混入する灰色火山性砂層と灰色の火山灰層をはさむ砂層である。

砂層には、しばしば炭質物が混入している。

(二) 長丘面

南北約一〇キロメートル、東西約五〇〇～二〇〇〇メートルのほぼ南北性にのびる長丘段で代表される。基盤の構造を切り、海拔高度は四〇〇メートル前後を示す平坦面で、赤塩面と同様にかつての千曲川の自由蛇行浸食によって形成された浸食段丘である。現在長丘段を貫入している千曲川の峡谷は穿入曲流であると理解される。すなわち、その当時の長丘面上に千曲川の河道が形成された後、地盤が隆起したが、その隆起量よりも千曲川の下刻浸食の量が大きかったために、河道の方向を変えることなく現在に至ったと解される。

長丘面上には新期火山灰Ⅱが被覆しているが、新期火山灰Ⅰはのせていない。したがって長丘面は、赤塩面以後に形成されたものと解される。

(三) 草間面

草間面は海拔高度三六〇～三八〇メートル付近に分布し、中野市し尿処理場をのせる面で代表される。本面は長丘面形成後、長丘面を浸食してできた面であり、随所に旧河道を示す微地形を残している。

面上には新期火山灰Ⅱをのせているが、それより古い新期火山灰Ⅰ、Ⅱはのせていない。

(四) 高丘面

中野市高丘小学校をのせる面である。海抜高度は三五〇メートル前後で、赤塩面・長丘面・草間面を浸食して形成された面である。面上には新期火山灰¹、²、³いずれおものせていない。

(四) 栗林面

模式地は中野市栗林である。この面は海抜高度三四〇〜三五〇メートルにわたる沖積面で、高丘面を浸食して厚さ一〇メートル前後の砂礫層の堆積面である。立ヶ花付近では、この砂礫層を切る基盤の走向に沿った断層が発達しており、断層活動が近い時代まで継続していたことがたっている。(中村二郎)

参考文献

- 1 斎藤 豊(一九五五) 長野県上水内郡豊野町付近の地質、信大教育学部研究論集五号
- 2 斎藤 豊(一九五九) 長野県野尻湖周辺のローム層、地質学雑誌六五巻七六六号
- 3 斎藤 豊他(一九六〇) 長野市北東部の新生代層、地球科学第四六号
- 4 井上 春雄(一九六一) フォッサ・マダナ東縁の構造盆地、辻村太郎先生古稀記念地理学論文集八八・九九
- 5 小林 国夫(一九六二) 第四紀(上) 地学叢書
- 6 中村 二郎(一九六四) 中野平の水理地質、第大教育学部科学教育研究発表報告No.1
- 7 中村 二郎(一九六六) 中野扇状地の形成に関する地形、地質学的研究、長野県地理学会研究発表要項一九六六
- 8 豊野 国研(一九七二) 長野県野尻湖周辺の火山灰層序、第四紀研究 第二巻第四号

第三節 茶臼峯の動物と植物

一、人間は植生をどのように変えたか

この地に人類が立った今から約一八〇〇年前の弥生時代から、人類は、この地の植生に対し、他の動物とは比較にならない程、いちじるしい影響を与えてきたにちがいない。

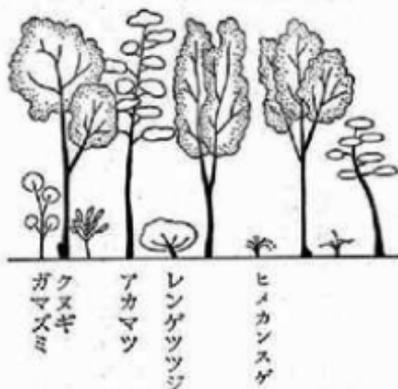
※ 植生：植物の集まり。地表をつつんでいる緑の着物。

- ① この地は、人間の影響をまったく受けなかったころは、常緑(夏緑)広葉樹林で被われていたにちがいない(自然植生)。
- ② この地は、人間の出現、そして、人間の長期にわたる自然植生の破壊によって、現在は、二次林としてのクヌギ・コナラ林が発達している(代償植生)。
- ③ そして、もし、人間がいなくなったとき、この地は、いったい、どんな林で被われるのだろうか(潜在自然植生)。

二、代償植生としてのクヌギ・コナラ林

表1から、わかるように、この林は、クヌギ・アカマツを高木層に、ヤマザクラ・レンゲツツジ・ノイバラ・ナツシロイチゴ・スイカズラなどを亜高木・低木層に、モチツボスミレ・ヒメカンズゲなどを草木層にもった、いわゆる、クヌギ・コナラ林である(第1表)。ただ、土壌水分が多く、ゆたかな土地であるために、コナラを欠いている。そう言えば、近くに、ハンノキがあったことからわ

第7図 タヌギ、コナラ林の構造



第1表 タヌギコナラ林の縦層別植物相

高木層	亜高木～低木層	草木層
タヌギ アカマツ	ガマズミ ヤマウルシ フウミズギ ウツギ ヤマザクラ コヤマユキ スハカリ ムラサキ レンゲツツジ ノイバラ マミツバキ ミツバケビ ハシリ ヤルト タノキ スウコギ カラコギ スイカズラ ナワシ	タチバナ ツバキ アケボノ オウゴン ウツギ ノスミ フヒメ ボシ キリンソウ ビロウ ギド タケ キナ ナキ ヒメカンスゲ

第2表 タヌギコナラ林に隣接した場所の草木相

草木層
ススキ イヌササ ユキササ オオササ シロササ フクササ カヤ ヤエタ スズメ タチバナ ヒメ ミズ スズメ ノハ ワ ヒメ

第3表 タヌギコナラ林の動物相

哺乳類	鳥類	昆虫類	爬虫類	両生類	魚類
ノウサギ キツネ ホウオウ イノシシ オニヒカモ	ジロメ ツバメ オニヒカモ ハシロ ツバメ ハシロ ツバメ	ハシロ ツバメ オニヒカモ ハシロ ツバメ オニヒカモ	カマキリ クモ ムカデ トビ ハシロ ツバメ オニヒカモ	カマキリ クモ ムカデ トビ ハシロ ツバメ オニヒカモ	カマキリ クモ ムカデ トビ ハシロ ツバメ オニヒカモ

かる。又、それと同時に、アカマツ林の様相も持ち合わせている。たとえは、ススキ・ミツバケビ・ヤマウルシ・サルトリイバラなどの存在は、それである。

三 植物分布のちよつとしたちがひ

茶臼峯一体は、果樹園としても、かなり利用されている。そこで、タヌギ林の草木層（第1表）と、隣接部分の草木層（第2表）とを比べてみると、あまりのちがいに気づき、驚く。

両者に共通な種は、わずかに四種（フキ・ヨモギ・ススキ・ワラビ）である。

四 動物相

一回の調査だけでは、この地の動物相を論ずるわけにはいかないが(第3表)、ただ言えることは、これらの動物たちとクスギ林との間には深い関係がありそうであると言ふことである。エナガは巢を作り、クスギ林全部を使用して、ヒナを育てていた。この一番のエナガは、来年どこへ行くだらうか。

五 人間生活と共に

人間生活と共に、植物も動物も変化する。そして、人間生活は、あらゆる所で、目まぐるしく、急速に変化している。慎重な人間の行動が望まれる。

(山田 勉)

第四節 茶臼峯周辺の遺跡分布

茶臼峯周辺とは高丘丘陵の範囲に限定して述べたい。この丘陵の北西には本邦第一の長流千曲川が銀蛇の如く北へ流下し、南東面には、かつて遠洲湖と呼ばれた湖沼跡が、現在は延徳田圃として豊かな水田が展開している。

丘陵の大部分は畑地で、僅かに山林が残っている所がある。この台地上には、幾つかの小丘が起伏して、景観は変化に富んでいる。古代からの遺跡は、この台地各所に点在し、それぞれの時代を特色づけている。他の地域に比して調査も比較的進んでおり、調査報告書も多い。

これ等の遺跡を編年順に第四表によって紹介すると次のとおりである。なお複合遺跡が多いので、その場合は主たるものを先に挙げた。(13/17頁参照)

中世も室町時代のものと思われる城館跡は八か所あって、この北信地方では、このように一か所にある例としては珍らしい。この台地に城館跡の配置する状態は、各要素をおさえ、要害堅固そのもので、北から善光寺平へ突出したこの丘陵はあたかも戦艦を思わせるものがある。かつて第十三師団(師団長長岡外史将軍)の師団演習が行われた時、この丘陵上に早く砲列を敷いた例が勝利だった由である。この譚評は高丘小学校で行われた。北から善光寺平をおさえる要衝の地であることを示す例である。

さて、この城館等のうち、今回の特設緊急発掘調査に関連する大久保館跡について概要を述べることにしたい。

高丘小学校は丘陵の略々中央部に位置し、館跡はこの南約四五〇メートルの字大久保地籍にある。周囲を小さな丘がめぐり、丘の凹みの中央部に、あたかも亀の背を思わせる小高い所に当ると推定される。特跡からは西へ約二五〇メートルで、見通しが極めて良く、お互の連絡は良好であつたらう。地籍は、一〇九一・一〇九八・一〇九九・一一〇〇・一一〇一・一一〇二・一一〇三・一一〇四・一一〇五番地である。面積は約一〇ヘクタールである。

以前は山林で、松林と雑木林(ナラ・クスギ)であったが、太平洋戦争の末期、即ち昭和二十年四月、食糧増産のため学童の手によって開墾され、甘藷・大豆が栽培された。巨木の老松は美しい林相

第四表 茶臼崖周辺の遺跡分布

遺跡名	時 代	所 在 地	遺 物 ・ 遺 構	摘 要
浜津ヶ池 (七九三二)	旧石、縄文、平安	栗林(遺池)	(旧)ナイフ、彫刻器、搔器、石刃 (土)磨石斧、打石斧、石鎌 (土)土環一基	(1) 神田五六「無土器時代の遺物を出した上元」長野県中野市浜津ヶ池と立ヶ花遺跡発見の先土器時代遺物」信濃一九の七
立ヶ花表 (六五六一)	旧石、弥生	立ヶ花(表)	(旧)ナイフ、彫刻器、搔器、石刃 (土)箱清水壺、髷高杯	○昭和三十七年一月発掘 (1) 中野市教委「立ヶ花遺跡発掘調査略報」昭和三十七年六月 (2) 浜津ヶ池(2)に同じ
立ヶ花 (六五六〇)	縄文、土師	立ヶ花(西原)	(縄)南大原式・上原式・下島式 (土)和泉式 壺、甕、埴	(1) 長野県教委「下高井」
牛 出	縄文、弥生	牛出(東原)	(縄)磨石斧、石槍、石皿 (土)太形蛤列石斧	○県史跡昭和三五五年二月一日指定 ○発掘調査 1 第一次昭和二年一月一日 2 第二次昭和三年九月 3 第三次昭和四年一月 4 第四次昭和五年六月 5 第五次昭和六年三月 6 第六次昭和七年七月 7 第七次昭和八年七月 8 第八次昭和九年七月 9 第九次昭和十年七月 10 第十次昭和十一年七月 11 第十一次昭和十二年七月 12 第十二次昭和十三年七月 13 第十三次昭和十四年七月 14 第十四次昭和十五年七月 15 第十五次昭和十六年七月 16 第十六次昭和十七年七月 17 第十七次昭和十八年七月 18 第十八次昭和十九年七月 19 第十九次昭和二十年七月 20 第二十次昭和二十一年七月 21 第二十一次昭和二十二年七月 22 第二十二次昭和二十三年七月 23 第二十三次昭和二十四年七月 24 第二十四次昭和二十五年七月 25 第二十五次昭和二十六年七月 26 第二十六次昭和二十七年七月 27 第二十七次昭和二十八年七月 28 第二十八次昭和二十九年七月 29 第二十九次昭和三十年七月 30 第三十次昭和三十一年七月 31 第三十一次昭和三十二年七月 32 第三十二次昭和三十三年七月 33 第三十三次昭和三十四年七月 34 第三十四次昭和三十五年七月
栗 林 (六五五九)	弥生、土師	栗林(北原、松原・野池)	(弥)荒山式・栗林式・百瀬式 (土)丸山式、平片刀、石鏡、小形磨石斧、石鎌、太形蛤列石斧、石鏡、細形管玉、勾玉、ガラス玉、滑石製模造品、凹石、堅穴住居跡三戸土環墓一(土)区分式 甕、坏(糸切底)	○発掘調査 1 第一次昭和二年一月一日 2 第二次昭和三年九月 3 第三次昭和四年一月 4 第四次昭和五年六月 5 第五次昭和六年三月 6 第六次昭和七年七月 7 第七次昭和八年七月 8 第八次昭和九年七月 9 第九次昭和十年七月 10 第十次昭和十一年七月 11 第十一次昭和十二年七月 12 第十二次昭和十三年七月 13 第十三次昭和十四年七月 14 第十四次昭和十五年七月 15 第十五次昭和十六年七月 16 第十六次昭和十七年七月 17 第十七次昭和十八年七月 18 第十八次昭和十九年七月 19 第十九次昭和二十年七月 20 第二十次昭和二十一年七月 21 第二十一次昭和二十二年七月 22 第二十二次昭和二十三年七月 23 第二十三次昭和二十四年七月 24 第二十四次昭和二十五年七月 25 第二十五次昭和二十六年七月 26 第二十六次昭和二十七年七月 27 第二十七次昭和二十八年七月 28 第二十八次昭和二十九年七月 29 第二十九次昭和三十年七月 30 第三十次昭和三十一年七月 31 第三十一次昭和三十二年七月 32 第三十二次昭和三十三年七月 33 第三十三次昭和三十四年七月 34 第三十四次昭和三十五年七月
安 源 寺	旧石、縄文、平安	安源寺(宮裏、石原・清水、日向)	(旧)ナイフ、彫刻器、石刃 (縄)磨石斧、打石斧、石鏡、石槍、石皿、蚌石、珠状耳環、土偶	○発掘調査 1 第一次昭和二年三月 2 第二次昭和四年五月 3 第三次昭和六年三月 4 第四次昭和八年三月 5 第五次昭和十年三月 6 第六次昭和十二年三月 7 第七次昭和十四年三月 8 第八次昭和十六年三月 9 第九次昭和十八年三月 10 第十次昭和二十年三月 11 第十一次昭和二十二年三月 12 第十二次昭和二十四年三月 13 第十三次昭和二十六年三月 14 第十四次昭和二十八年三月 15 第十五次昭和三十年三月 16 第十六次昭和三十一年三月 17 第十七次昭和三十二年三月 18 第十八次昭和三十三年三月 19 第十九次昭和三十四年三月 20 第二十次昭和三十五年三月
江 戸 安	旧石、縄文、平安	江平(日向)	(旧)ナイフ、彫刻器、石刃 (縄)磨石斧、打石斧、石鏡、石槍、石皿、蚌石、珠状耳環、土偶	○発掘調査 1 第一次昭和二年三月 2 第二次昭和四年五月 3 第三次昭和六年三月 4 第四次昭和八年三月 5 第五次昭和十年三月 6 第六次昭和十二年三月 7 第七次昭和十四年三月 8 第八次昭和十六年三月 9 第九次昭和十八年三月 10 第十次昭和二十年三月 11 第十一次昭和二十二年三月 12 第十二次昭和二十四年三月 13 第十三次昭和二十六年三月 14 第十四次昭和二十八年三月 15 第十五次昭和三十年三月 16 第十六次昭和三十一年三月 17 第十七次昭和三十二年三月 18 第十八次昭和三十三年三月 19 第十九次昭和三十四年三月 20 第二十次昭和三十五年三月

がまん溝	弥生、土師	草間(西道 端・西山)	(弥)栗林式・箱清水式 高坏、器台、甕、瓮、土罐、紡錘車(土製) 磨石片、打石片、太形蛤刃石片、扁平片刃 石片、石胞丁、凹石、細形管玉、ガラス玉 土環墓(栗林式)二 土環墓(箱清水式) 二三 (土)国分式 甕、瓮、埴、坏、高坏 竪穴住 唐址 (弥)奈良末期 甕、瓮、坏 トネル式無段登窯 (室町)後期 古銭一二、釘、播 大葬墓一二、土葬墓二 (江戸)後期 小柄 寛永通宝、鋳 土葬墓二	の「弥生式土器」信濃一八の四 2、中野市教 委「安源寺」
草間中組	弥生	草間(屋敷跡)	(弥)栗林式 甕、太形蛤刃石片 (弥)栗林式・箱清水式 甕、瓮、高坏、勾玉 (土)国分式 甕、瓮、高坏、坏	1 金井正彦「中野市草間出土の栗林式土 器」高井三
高屋敷	弥生、土師	草間(高屋敷)	(弥)栗林式・箱清水式 甕、瓮、高坏、抛土、抛石、凹石 (土)甕、高坏	1 金井正彦「中野市草間出土の栗林式土 器」高井三
小丸山古墳 (七九一五)	古墳	安源寺(庭塚 八九四)	(古墳)後期	○円墳 ○墳丘ほとんど破壊、直刀出土と伝える。
栗林一号古墳 (七九一三)	古墳	栗林(西原三 九)	(古墳)後期 径一メートル 高さ二メートル	○円墳 (白山姫古墳)
栗林二号古墳 (七九一四)	古墳	栗林(上原三 九)	(古墳)後期	○円墳 ○方墳説もあるが円墳であろう。
立ヶ花古墳 (七九一九)	古墳	立ヶ花(表)	(古墳)後期 径約二五メートル 高さ約三メートル	○円墳 ○完存

京塚古墳 (七九〇八)	古墳	草間(西山二 一〇九)	(古墳)後期 径三〇メートル 高さ二・二メートル	円墳 ○完存
西山古墳 (七九〇九)	古墳	草間(西山)	(古墳)後期 径一メートル 高さ一・三メートル	円墳 ○直刀出土、約五〇センチ
御嶽山古墳 (七九一〇)	古墳	草間(上ノ山 一九八六の B)	(古墳) 径三三メートル 高さ四・二メートル	円墳 ○完存、墳頂に御嶽社を祀る。
高山一号古墳 (七九一一)	古墳	草間(東山二 〇六一)	(古墳)後期 径二〇メートル 高さ二・三メートル	円墳 ○昭和四五年三月破壊
高山二号古墳 (七九一二)	古墳	草間(東山二 〇六一)	(古墳)後期 径二二メートル 高さ二・五メートル	円墳 ○昭和四五年三月破壊
立ヶ花表山 窯址	平安初	立ヶ花(表山)	(須)甍、甍、坏、半地下式無段登窯二	○発掘 昭和四五年三月 1. 金井浪次「中野市立ヶ花表山古窯址調査」高井二四 ○付近に二基完存
清水山窯址	平安初	立ヶ花(清水 山)	(須)甍、甍、坏	○三基略々完存
池田燗窯址	平安初・末	草間(林畔)	(須)甍、甍、坏 和目瓦(平安末)	○一基完存、一基破壊
大久保窯址 (六五六三D)	平安初	草間(大久保)	(須)甍、甍、坏、高台付坏 半地下式無段登窯	○発掘調査 昭和四五年三月 1. 大川清・金井浪次「長野県中野市草間窯業遺跡」信濃一七の二二
茶臼窯址	奈良末平安初	草間(茶臼)	(須)甍、甍、坏、高台付坏 トンネル式無段登窯一 半地下式無段登窯	○発掘調査 ・第一次昭和三八年三月・第二次昭和三九年四月・第三次昭和四六年三月 1. 前項1に同じ 2. 金井正彦「中野市草間茶臼窯第七号窯址調査」高井二五

東池田窯址 (六五六六)	平安初	草間(東池田)	(須)甕、甕、杯	〇三基完存、一基半壊
林畔窯址 (六五六七)	平安初	草間(林畔)	(須)甕、甕、杯	
中原窯址 (六五六八)	平安初	草間(中原)	(須)甕片、窯滓	
上ノ山窯址	平安初	草間(上ノ山)	(須)甕、甕、杯	〇數基存在すると推定される。
鳥軒割	弥生、土師	立ヶ花(鳥軒割)	(弥)精滑水式、甕 (土)高杯、甕、埴、杯碗 (室町)茶臼	
安源寺城跡	室町	安源寺(堀籠)	東西六八メートル 南北六八メートル 東西に土塁三二メートル残る	1、高丘村誌 2、長野県町村誌北信篇 3、中野教委「安源寺」
安源寺城山 (山城)	室町	安源寺(城山)	東西九〇メートル 南北六五メートル 土塁、空堀残る。	1、長野県町村誌北信篇 2、中野市教委「安源寺」
牛出館跡	室町	牛出(西原)	東西六七メートル 南北六八メートル 土塁東北二か所に残る。	1、高丘村誌 〇部落の人は通称は館の道という。
立ヶ花城跡	室町	立ヶ花	本郭、二の曲輪、空堀残る。 礎に土塁をかまえた民家(小林角兵衛氏)あり	1、高丘村誌 2、長野県町村誌北信篇
草間城跡	室町	草間(堀)	東西四五メートル 南北三三メートル	1、高丘村誌 2、長野県町村誌北信篇
大久保館跡	室町	草間(大久保)	明治一九年一月井戸址より石臼、鹿の角を 発掘	1、高丘村誌
茶臼峯跡	室町	草間(茶臼峯)	(室町)鉄鏡、五輪塔	1、高丘村誌 2、長野県町村誌北信篇

安源寺跡	安源寺	(室町)宝篋印塔、五輪塔	1、高丘村誌 2、長野県町村誌北信篇
宗源寺跡	草間	礎石	1、長野県町村誌北信篇
竜徳寺跡	草間(西山)	礎石	1、高丘村誌 2、長野県市町村誌

注 1 遺跡名の横に付した()は文化庁登録の遺跡番号である。

2 所在地は大字で示し、その下の()は小字を示す。

を呈し、学童達の写生の対象であったが、戦争中の供木で伐採されたあとの開墾であった。強粘土のため鉄入れは難渋したことを記憶している。開墾時には、中央部から縄文時代の打製石斧一点、東北隅から固分期の土師器片が少量発見されて珍らしがられた。

西隅の一部はまだ原野が残っており、その中に井戸跡がある。井戸跡については昔から伝承が残っており、また高丘村誌には次の記事を載せている。

草間村大久保ノ地、其昔ハ大久保村ト称シ、此処ニ居住シタルモノナリトノ口碑アリ。適々明治十九年十一月中、草間村農酒井園吉氏等、同村大久保ノ地ニ清水僅カニ湧キ出ヅル所アリ、之レヲ発掘シタルニ、必ズ浄水得ント其試掘スルニ当リ、地下七尺ニシテ石臼・鹿ノ角等ヲ発見ス。角ハ刀掛ケニシタルモノナランカ。既ニ腐朽シタル部分アリト雖モ又珍器ナリ。現ニ酒井氏之レヲ保存ス。

酒井氏の孫、和吉氏に遺物の存否をたずねたが不明の由であつ

た。

太古から存在したと思われる一筋の小径が、草間丘陵の尾根上を東から西へ貫ぬき、古老は「永年通り」と呼んでいた。この小径の中央部から北へ下ると、館跡へ通ずる小径がある。この小径が館跡へ入る所を大手と見たい。

開墾や道路拡張によつて、地形の変化は多少みられるが、ほぼ原形をとどめているものと思われる。館跡の周囲は一・五〜一メートルの土堤があつて、平地とは段となつており、西・南側がもつとも判然としている。

館跡の中央部を東西に、昔から馬入れと呼ぶ小径が走り、その道沿えの東北部分に少し高い地点があつて、ここに館が存在したのではあるまいか。中世のものとは推定される陶質の火鉢の小破片が出土している。

この館跡は草間氏の最初の拠点であろうと考え、やがて草間城(草間・堀)へ移るまで或る期間の居館であろう。(金井清次)

第五節 茶臼峯城營遺跡の史的環境

一 草間台地と草間氏

かつて私が草間の台地を通り、立ヶ花渡場を経て豊野駅へ赴いた時のこと、渺々と続いた栗の原が北方は水平線まで青空に消え、一方安源寺部落に近く異國情調の風車の立っている景觀をながめ、この地の八幡宮にゆかりある馬市の歴史など様々な連想にふけったことがあった。

木曾義仲が源頼朝に滅ぼされたのは元暦元（一一八四）年正月のことである。この年二月、藤原秀郷の子孫にあたる尾藤太知宣なるものが、義仲に属していたので相伝の失った所領回復を懇訴しようとしてひそかに頼朝の御氣色を伺っていたところ、呼び出しがあつて参向の次第を尋ねられた。そこで知宣は思ひせず中野御牧は祖先秀郷の戦功で賜った相伝の地であつたが、平治の乱に源義朝（頼朝の父）に御方したため没収され浪電の身となつた由緒を述べた。当時は中野御牧に隣接して箕原・金倉井御牧もあつたが、中野御牧はすでに開発が進んでいわゆる中野郷が成立し、藤原助弘（中野氏の祖）がその下司職となつていた。今や未開発で御牧の旧態を遺しているのは草間台地の一番ではなかつたかと想像されるのである。

この台地に牧人として移住して来たものは草間氏ではなかつたか。平安時代に筑摩部の草茂庄におこつたと思われる草間氏はある

が、当地の草間氏の出自に就いてはその關係は不明である。あるいは佐久方面から入来した土豪ではないかと思われる筈がある。延徳沖周辺の未開拓地に早く草間氏と並んで入り来つたものに矢島氏がある。矢島氏の本拠は佐久郡南牧村であるが、木曾義仲を助けて横田河原の合戦で活躍した遊野党で、鎌倉時代末には高井郡に移り、奥矢島と称せられて諏訪上社の大宮造官役を勤めたり、室町時代中期には同社の頭役を担当している。また小沼部落の開発も佐久との



第8図 大久保居館より茶臼峯を望む

伝承を有し、後述の庄内八幡宮のことなど考えると、この假定が荒唐無稽とも思えない。草間の台地は千曲川によって西と北が区ざられ、東と南は丘陵に囲まれた地で、草間氏は此処を根拠とし、その最初の居館を字大久保に構えた。したが



第9図 立ヶ花山城跡 (左の鉄塚付近)

って茶臼峯城砦と立ヶ花山城等はその関連遺跡である。居館は周囲を広い空堀地形に囲まれた高地にあって、その西隅には現在も豊かな水を湛える古井戸があり、近くには現在御魂池と称せられる沼池を控え、東北なる茶臼峯城砦は中野平を一望に見渡す位置にあって附近に旗塚なるものを附屬し、里人は大久保居館の烽火台と称している。立ヶ花山城は台地の南西に位置し草間丘陵の突端に構築され、眼下に千曲川の渡し場をのぞめる本格的な山城である。その第一郭は最も高き

にあつてはほぼ円形をなし土塁はなく、中央より北寄に小高い部分があつて巨石が据えられている。広さは東西約一四メートル、南北約一一メートル、やや傾斜をもつた平地である。第二郭は平坦で広く、北側に幅三メートル、高さ

二メートルの土塁を備え、東西約三〇・二七メートル、南北約一五メートルあり、第一郭との間には幅三メートル、高さ四・三メートルの空堀を有し、北側には深き五メートル、幅二・五メートルの空堀を備えている。第一郭は本城の監視所に用いられた構えと見え、展望の絶佳なること普光寺平・上高井方面が双眸におさめられ、直下の渡し場を警衛する重要地点にて第二郭はこの山城の主郭である。水の手は北側の堀を下つた地域にもとめることが出来る。なおこの構えに附屬した番所は立ヶ花字表にある小林角兵衛氏の屋敷で、現在も本陣と称している。

二 高梨氏と草間台地

高梨氏は井上氏の分流で、鎌倉幕府の渡びるや松川北の標原庄の旧地頭矢野氏を逐つてこの地に国人領主としての基盤を据え、殊に高梨種頼は一族の惣領として団結連合に心を配り、よく時代の流れを洞察し、足利尊氏党となり、その地位を巧みに活用して領土の押領拡張をはかつて北進した。種頼はまず山田地方より山ノ内地方に勢力を伸し、続いて中野の地を包囲して延徳沖周辺に侵略の歩を伸し、建武年中には草間氏を降して草間の台地をその支配下に収めたものと思われる。今日草間台地には大久保居館跡のほか牛出の居館跡と安原寺居館跡とがあるが、何れも高梨氏に關係ある遺跡と推定される。またこの台地には実に夥しい五輪・宣流の諸塔が散在し「五輪原」などの地名も遺っている。安原寺部落では、これらの塔石を集めて築かれた井戸側もある程である。この井戸が河川の改修



第10図 安源寺部落の井戸側に使用されていた
塔石 (石田正武提供)

のため取りこ
わされ、使用
された塔石は
写真のように
保存されてい
る。これらは
牧の経営当初
から高梨氏の
時代にわたる
長い歴史を秘
めた記念物で
あるから、改
めての精細な
調査が期待さ
れる。

草間會地の

対岸は木内郡大倉郷で、金沢文庫の創立者である北条実時の子孫が、寺領名寺に寄進したところである。ところが北条氏の滅びた後は、寺領が一時保果長俊なるものに押領され、建武五(一三三八)年に同寺雑掌の慈訴によって足利直義は称名寺に所領を安堵させた。この頃、尊氏は称名寺と対立していたので太田庄の島津宗久に同郷知行の下知状を与えた。この二頭政治の混乱が尾を引いてこの後、島津氏は尊氏の下知状を楯として侵略を続け雑掌をなやましているのである。

が、この島津氏の非法を対岸から後援し続けているのが経緯であった。結局足利義詮の代になって大倉郷は島津領に帰してしまった。

三 本誓寺と牛出

高田の本誓寺には同寺に関する中世の留書がある。それには本誓寺が関東の布川から中野氏をたよって中野の地に移り来り布教をはじめたところ、高梨氏が侵入して中野氏を滅ぼすにより、やむなく笠原氏のもとに逃れてその被護を受けることになった。然るにまた高梨氏の侵略にあつてとうとう高梨領内の牛出に移った。本誓寺が中野を逃れて笠原に赴いた時、それより四・五年おくられて中野入りした師匠道祐の子供たちがすでに牛出に越し在所を見立てて、師匠を牛出に呼びよせた。牛出居館にいた高梨氏は早速御堂を建てて優遇してくれたが、この御堂の基き樺は牛出ぶきという特殊なものであったとのである。高梨氏は本誓寺たちにこの外に望むものがあらば何なりと申せとのことであつた。師匠は別に望みはない、ただ一たび広野へ出て布教したいとのことであつた。高梨氏はそれはいと易いこととて師匠を中野の地へ連れて此処に阿弥陀堂を設けてくれたので、そこで信心を重ねられた。さてその後師匠が中野から井上へ越される時牛出に子供達をのこして行かれたが、本誓寺は師匠と共に井上へ越し、そこで繁昌したのである。蓮如上人の来寺のときなどはその幹旋に奔走して蓮如から親しく本誓寺の寺号をたまわり願額の文字もいただいた。その際師匠は蓮如に請うて、もとの真宗寺の寺号を本誓寺以外の子供にも許してもらつた。師匠



第11図 牛出の居館跡 (石祠は稲荷社)

に続いては高い土塁を備え、裏手北側土塁の外は深い空堀となっていて、かつては水壕であったという。館の南方の一隅に稲荷河がのこされている。堀は埋められているが、東北六七メートル、南北六八メートルに及ぶ広大な居館である。しかし、本誓寺のおかれた位置は明らかでない。私はこんな大規模な居館がひっそりと存在していることを知って驚くと共に不明を恥じ入った次第である。

に國従して井上に行った子供は、後の飯山真宗寺となり、牛出にのこった子供は大坪真宗寺を称することにるのである。牛出の居館は牛出部落西方現在林橋園の字「館の道」にあって南面し、西は段丘をもって千曲川に接し、居館の北側より西側

四 大塚合戦と草間大蔵

北信濃の國人層の室町幕府に対する反抗が治まらないので、幕府は従来の政策を改めて幕府の直轄にするなどして努めたが、結局小笠原長秀を新守護に任命することにした。長秀は応永七(一四〇〇)年、守護就任の披露のため平芝の守護所に入り、一族をはじめ伊那衆を従えて善光寺に意気揚々と入部したが、村上・高梨・井上・須田・島津等をはじめ大文字一揆の反撥にあつて遂に大塚合戦となった。この戦いに高梨朝高は嫡子棟原次郎・次男上条介四郎・江部山城・草間大蔵・木島・吉田・菅間(須毛)等、宗徒の兵をひきいて激戦したのであるが、棟原次郎は敵の勇将坂西長国と組うちとなり遂に討死した。このとき主を討たせまいと郎等一〇余人同じ枕で討死するという悲痛な事象となったのである。草間大蔵の消息はわからないが、討死はまぬがれたにしても、随分大きな勇手を被ったものと推測される。

五 山ノ内の反乱と草間大次助

高梨朝高の曾孫政高、その嫡子政盛の代にかけて大隈・新野両氏は滅ぼされ、政盛は遂に中野氏を逐って中野の地を占領した。政盛は越後守護代長尾為景を援けて関東管領上杉顕定と争い、その首級をあげるといふ手柄をたてたが、重臣草間大次助の活躍も並々ならぬものがあつたと思われる。政盛が中野入りを果すに当り、山ノ内地方の土豪小島・夜交両氏に対し強い圧力を加えて被官化したた

め、宿怨も重って永正二〇（一五二三）年政盛の死去後間もなく同氏連合して反乱を企てようとした。草間大次助は事前にこの密謀を深知し、政盛の嗣子源頼を操けて奇襲を企て、両氏を山踏みして捕えて極刑に処し、居館・町屋を焼き払い壊滅的な打撃を与えて高梨家を安寧ならしめた。

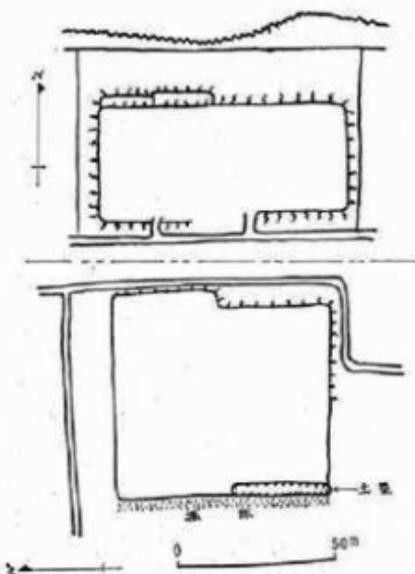
六 小笠原長時草間氏の館に来る

筑摩郡林城主小笠原長時は安筑地方に威を振っていたが、諏訪に侵入した武田晴信はその城代として板垣信形をして小笠原勢に備えた。長時はこれを追い払わんとて仁科道外のほか旗本衆をひきいて諏訪に攻入った。当時の旗本衆には草間肥前・同養子源五郎等がいたが源五郎は近習役をつとめていた。その後長時は塩尻で晴信と戦って敗れて以後林城を逐われ、諸城を失って止むなく越後の長尾景虎の許に到った。二木家記ではその時の様子を次の如く伝えている。

天文二二（一五五二）年二月晦日の夜、小笠原長時公・同典監公・御小僧様・岡清盛殿、中洞を忍びて御出なされ、御供の衆は草間肥前・坂西次郎・征矢野大次助・同基助・二木六郎右衛門其外御手廻りの衆ばかり召し連れられ、河中島草間まで御退きなされ候、長時公無事退き申すべき為、二木豊俊・同土佐其外一門皆中洞の城に相残りまかりあり、長時公草間へ御着なされ候、御一左右を承り、天文二二年癸丑の正月十六日に中洞を忍て罷り出で草間へ参り、長時公御供申し、越後へ罷り越し、景虎公を御頼み

越後へお入り二年御座候へども云々

さてこの記事はそのまま受け取り難い節もあるが、草間肥前と当地方の草間氏との関係であるが、二木家記では草間肥前は二木土佐の次男としている。二木氏は南安藝郡の人で小笠原氏の有力な家人である。この時小笠原氏一行を退えた居館は勿論字堀にあるものであるが、草間氏が大久保より此処に越した時期は明らかでない。恐らく延徳沖へ向っての水田開発が進んで集落が現地に発達するようになってからのことであろう。



第12図 堀の草間氏居館跡（上）と安源寺居館城跡（下）見取図

七 高梨政頼と草間出羽守

高梨政頼が父澄頼から家督をうけつた頃には室町幕府の威信は地に落ち争乱に明け暮れ皇室の衰えが甚しかった。政頼は父祖にならなう皇室に忠誠を尽し、すでに従五位に就けられていたが、更に皇室へ修理料の献上で従四位に就けられ、天文二十二年春に諸患のため上洛しようとして京中の夫役を村々に課し翌年春決行した。そして留守中のことは草間出羽守等に委せ、上洛のついでに石山本願寺に證如上人を訪ねている。この頃草間氏は大銅郷の旧浅野氏の所領の一部をも知行している。

その後永祿二年一〇月、上杉輝虎は関東管領に就任した。その榮譽を祝賀するため、政頼は使者として草間出羽守を遣わして太刀一振を贈っている。併しこの頃はすでに政頼は武田信玄の侵攻のため中野城を自落し、やがて草間氏同道轉後に赴いたのである。草間台地はこの後武田・織田時代を迎えたわけである。

八 高梨頼親の選住

春日山の城将まで勤めた高梨政頼は遂に越後に客死し、その家督は次子頼親に譲られた。越後では輝虎の死後、朝上杉景勝と養子向景虎との間に後嗣に関する相継争いがおこった。高梨氏は景勝方であったので、勝利をえた景勝は論功行賞として、草間正左衛門には越後で赤川新兵衛分と五十嵐式部分の地を宛行った。その後信濃の支配は武田氏より織田氏に変わり、織田信長の本能寺にたおれるや、北信濃四郡を支配していた森長可を逐って景勝が進攻して占領

した。いうまでもなく景勝は信濃の亡命者の宿願を果さしめようと努めた。頼親も選住者の一人であるが、本貫の中野郷は先忠者に与えられているので、止むなく草間台地及びその附近の地二、〇〇〇貫を宛行われ、安源寺の旧居館に一旦居を拠え、新に安源寺山城の構築にかかった。頼親は文祿三年二月に牛出村の高梨備後守知行分の内二〇貫余の地を舟丸某に宛行っているが、主家が入対のため草間氏は、ついに選住出来なかつたわけである。

九 庄内八幡宮と安源寺

天正一〇（一五八二）年八月、頼親が草間台地の故地に入るや、領主を失って衰微に傾いていた氏神にあたる庄内八幡宮にまず一〇貫文の社領を寄進した。この神社はもと高梨氏の本郷地であった鹽原庄内（上高井郡小布施町六門川）にあったが高梨氏の北進によって移されたものである。最近まで八ヶ郷（安源寺・同新田・草間・立ヶ花・牛出・栗林・片塩・江部）の総社として崇敬されて祭祀が行われていた。天正頃の神主は立神を姓としているが、天正一四年三月に領主望月印月斎一峯が望月牧にある佐久郡大玉郡大宮によせた書状を見ると、神主は立神である。立神姓は馬の「たてがみ」に因んでおこった姓で、両者の姓は偶然の一致とは思えない。前述のように望月牧と草間の牧場とは以前から何か関係のあったことを示唆しているようである。中野地方を例にとりて見ても高梨氏の選住の後へ武田方の支持につながる多くの甲州・佐久方面の人々が移住して来ている。

また安源寺も八幡宮と同様に大権那を失って致え殆んど無住に近い歲月を逃げていたと思われることは、天正十一年一月上杉景勝が塔頭と思われる円慶寺に安源寺と常楽寺の管理を委せていることでも察せられる。安源寺は結局頼親によって往時の如き復興をみるに至らなかつたのであるが、今日居館の近くに広大な屋敷をのこし、附近に宝篋印塔・五輪塔等の散置している姿が見かけられその長い寺史の跡を偲ぶことが出来る。

頼親より景勝への中野館を望む切なる願いが天正末年には叶えられたようであるが、それも東の間で、慶長三年春の上杉氏の金津移封によって、高梨氏は再び領民と袂を分つ運命となつた。

今回発掘調査された茶臼峯の遺跡は高梨氏と堅く結ばれて活躍をつづけてきた草間氏の歴史を採る上に意義深いものがある。

(金澤寄久一節)

第六節 茶臼峯・草間氏関係の伝承

茶臼峯警勝について

昭和九年九月一三日、九一歳で没した私の祖父甚蔵翁は、千曲之真砂や甲陽軍鑑等を座右に置き、常に愛読していた。折にふれ、川中島合戦をはじめ各種の歴史の話をしてくれた。私はまだ就学前のことで、その頃はテレビは勿論ラジオも普及していなかつたから、非常に興味をもって耳を傾け聞入つたものである。その話の中で

「茶臼峯は、草間丘陵の中で一番高く、四方をよく見渡せ、眺望

の勝れた所で、二等三角点がある。大昔は烽火台に使われていた。全体の形は茶臼のようで、馬蹄形の土塁がある。馬蹄形の築砦は戦国時代の様式で、川中島合戦の戦場となつていたと思われる。合戦に關係した遺物が所在するのではないかと思つて一部を発掘してみたが五輪塔が出土した。」

という一節は今も忘れない。ただ、惜しいことは五輪塔の出土地点や数量、発掘後の安置場所について聞いておかなかつたことである。祖父は五輪塔が出土したと話してくれたが、宝篋印塔も含まれていたのではあるまいか。現在、自宅の屋敷内には五輪塔・宝篋印塔が数基安置されているが、これにあたるのではないかと推定されているからである。石質・形態とも全く同じうえ大きさも略々同形であるからである。

長野県町村誌北信篇には「(前略)今に至り近傍を耕耘する者、往々鐵或は鎗、鏃等の土砂融入したるを得るあり。」とあって、古くから武器の出土例があるため、祖父も遺物を得たいと思つて、部分発掘を試みたものであろう。

誠館跡と草間氏等について

東京家政大学教授草間正夫先生が、突然私の宅を訪問されたのは、昭和四二年八月一七日の早朝のことであつた。私の日記に、当日の模様を次の如く記述している。

草間先生宅の伝承には、祖先は善光寺平の草間部落に居住して

いたことがある由である。明日は高田市（本籍）で母堂の法要を営むため帰省するが、草間部落を踏査したいと急に思い立寄られたとのことであった。朝食を差し上げ、竜徳寺へ案内する。住職の宮崎孝道師と種々懇談、草間氏に関する文書を出して下さったので、草間先生はこれを写真に撮影された。その後、日和山神社の南方に所在する草間城へ赴き、遺構を巡視した。それから更に裏山を越えて、大久保地籍へ案内すると、先生は「ここが草間最初の居住地であったと言伝えている場所である。」と語られた。一〇時一五分草間原、バス停から帰られるのを見送った。

草間先生のお話によると、草間氏は井上氏の別れで、大久保（草間）へ居館を構え繁栄した。川中島合戦に敗れて没落し、越後の高田へ移り、帰農した。高田市内には草間姓を名乗る家は一五・六軒ある。

家紋は九枚重ねの笹、冑や朱塗りの鎖通等があり、観音菩薩の拝仏も奉安してある由であった。また墓地の墓石は、造りに特色があるとも語られた。

竜徳寺の文書には葛尾城主村上氏の別れで高梨氏の客分として草間に居住。川中島合戦の折五代目の草間主殿之助淨義は永禄四年九月一〇日戦死し、子孫は越後へ移ったと述べている。

草間先生は、その後二回来訪されたが、母の葬儀の日であったり、学生を連れての用務出張の途次であったりして、懇談する時間は持つことができなかった。

草間部落の前身は大久保にあって、一七軒であったとは昔からの

伝承である。遠洲湖は周辺から次第に開拓され、草間田圃の西南地帯には「一七配」と呼ばれたる小字が整然と区画され、また、その



第13図 茶臼峯・大久保遺跡分布図

- A 茶臼峯遺跡 B 1号遺塚 C 須恵器片集積跡 D 大久保館跡
E~N 遺塚 1~7 茶臼峯遺跡群 1~4 大久保遺跡群

誇りには「一町配」という小字もある。一七配は一七軒に地割して配分されたとも伝えている。

龍徳寺（曹洞宗）の山号は「応永山」と称し、応永年間に西山の丘麓に草間氏によって創建されたが、川中島合戦の兵火の厄にあり、現在地に移ったとの口碑である。長野県町村誌北信篇にもこの

第二章 調査

第一節 昭和四八年以前の調査

一 明治・大正時代の調査

古くから高丘の丘陵には、先史・原史・歴史時代にわたっての、遺物の出土があった。茶臼峯周辺からも、その出土を伝えている。

明治一二年一月八日の草間村誌編輯人から、古跡の一つとして報告がなされている。

古跡（古城址）本村の西、字廻にあり東西二十七間、南北二八間、回字形をなし、平地より高き事一丈許四面遺濠あり。今は残らず民田となる。然れども其遺跡顯然として里俗稱して草間城と云う。（中略）永徳二年己未三月武田氏兵を撃て高梨政頼を略す。此時当城も陥られ、淨義・政頼に従い越後に逃れ上杉景虎に拠る。

（中略）武田氏本城を攻むるの際本村にある烽火台及び当城に火を

事情を明記している。

石臼・鹿の角が大久保の古井戸から出土した事情は祖父からも再三聞いたし、高丘村誌にも記載されている点については、すでに前節に述べたとおりである。

（資料出典）

放つ、城郭灰燼となる。以降廃城たり。（後略）

〔烽火台址〕本村の東、日和丘嶺上字茶臼峯にあり。東西二間、南北十五間、五稜形をなす。遺器等依然として猶存す。今に至り近傍を耕耘する者、往々釧或は鎗・鏃等の土砂蝕入したるを得るあり。

ここでは、中野小館城主高梨氏の家臣草間氏が草間城に居城しており、その関係の烽火台としてとらえている。両者共に、永徳の戦乱で城と共に灰燼となり、廃城したとしている。

また大正初期の高丘村誌によると、直探茶臼峯についてはふれていない。しかし隣接の大久保地籍は、遺物の発見地となっている。大正一〇年頃から養蚕が盛んな時期には、深耕がなされ、急激に遺物の出土が増加してくる。土器の破片が邪魔になり、籠に集めて捨てたことを古老が伝えている。

二 「信濃史料考古編」のための調査

信濃史料刊行会は、原始社会から近世初頭にわたる信濃の史料を集大成するため、昭和二六年からその事業に着手した。その考古編は、大場磐雄博士が監修され、永峯光一氏等が資料採集に当たられた。下高井地区は神田五六氏と金井汲次氏が同行して行なわれた。

田川幸生も仕事に關係を持った。

この段階では、茶臼峯には古墳四基が記されているだけで、城跡・窯跡關係は記載されていなかった。この古墳は、昭和二八年発掘調査された。それについては、次の項を参照されたい。

三 茶臼峯古墳と草間窯業遺跡の調査

昭和二八年、中野市の農業改善事業の一環として、草間丘陵一〇ヘクタールを開墾し、果樹園造事業が進められた。茶臼峯地籍の雑木林もその対象となった。そのため、前記の四基の古墳も破壊の運命にあり、その調査が行なわれた。

発掘の結果遺物は何も認めなかった。これは古墳ではなく、民俗關係の塚ではなからうかと推定された。

しかしこの調査が動機となつて、この茶臼峯附近から、大窯業社群が発見された。その調査が、昭和三八年から三九年にかけて、三次にわたつた行なわれた。大川清氏（早稲田大学文学部講師）金井汲次氏（現県教委文化課文化財係長）が中心となつて調査にあつた。調査は主として茶臼峯と大久保地籍であつたが、その周辺に広がる大窯業社群であることが確認された。

以下その報告の概要を示すと、次のようである。

〔遺構〕 トンネル式無段登窯一基、半地下式無段登窯九基

〔遺物〕 須恵の甕・壺・蓋・坏・高坏等

〔年代〕 八世紀半から九世紀中葉

なおこのような大窯社群の存在は、良質粘土による窯の構築・製品原料として好適であつたばかりでなく、斜面の地形・製品の需給關係など好条件をそなえていたものであろう。

その後四六年にも茶臼峯の窯業遺跡の調査が行なわれた。

四 調査前における遺構の確認

以上今回の調査前における遺構の確認として、集約すると次の如くである。

○茶臼峯山頂には馬蹄形の土器があり、すぐ南隣りには、土盛遺構がある。これは古墳か民俗關係の塚か古墳であるかは不明な遺構である。なお今回の調査の対象とはしなかつたが、東側の下段に曲輪状の平地の遺構がある。これら三者で壱を形成していると考えられる。

○壱のまわりの下の斜面には、多くの窯跡關係の遺構が所在し、多くの須恵器破片や窯滓の出土をみる。

○その他に五輪塔・宝篋印塔・土師器破片等が附近からたびたび発見される。

（田川幸生・山上孝）

註1 池田綱道「草間村」長野県町村誌北信編 昭和二十一年七月二十八日

2 高井村「高井村沿革」高井村誌 大正年代

- 3 金井政次「昭和四〇年以前の調査」中野市教育委員会 昭和四二年三月三十一日
- 4 信濃史料行會「中野市高丘地区古墳」信濃考古総覧上 昭和三十一年三月三十一日
- 5 金井政次「土器遺構」中野市高丘丘陵の土器・土器遺構 昭和四〇年三月
- 6 大川清・金井政次「長野県中野市草間遺跡」信濃 一六一—一六四
- 7 金井政次「中野市草間茶臼墓第七号竪穴調査」高井第二五号 昭和四〇年六月二十五日

第二節 調査経過

一 発掘までの経過

今回の発掘調査にあつたの報告は、それぞれの専門の諸氏から寄稿いただきましたが、発掘調査に至るまでの経過についてふれてみた。

そもその話の発端は、昨年十二月中ごろであった。市農政課の係員から「西条・新保地域の水田がカドミウムに汚染され、これにともなう排土事業のため高丘地区草間茶臼墓附近から三万立方メートル余の土を求めたい。ついては、この茶臼墓一帯には埋蔵文化財があるようだから適切な指導を……」という相談があり、茶臼墓附近については、かつて農業構造改善事業による樹園地造成がなされ、それに際し幾つかの「竪穴」の発掘調査が行なわれたこと、今回の土取り予定地にも可能性があることから、金井（政）先生の

ご指導を仰ぎに県庁を訪ねたのは暮もおしせまつての二月十九日だった。

「この予定地は、すでに調査済みであり、今回の土取りにあつても埋蔵文化財が存在する可能性はきわめて少ないが、土質・土取り可能量調査のための試験掘り（約三メートル角）にあつては充分に注意をし、場合によっては緊急発掘を行なうように」とのご指導をいただいた。

この時の土取り予定地には今回調査の「特跡」の存在する山頂附近はこの土取り予定地には含まれていなかった。農政課としても、市教委としても山頂附近には「特跡」があることから土取りは避けたい方針で、他に土取り可能地を物色していたからである。

しかし、他の場所からの土取りはきわめてむづかしく、山頂部分からの土取りのため事業主体が経費を負担し、発掘調査を行ない記録保存をする」との結論に達したのは一月も下旬だった。

この結論にもとづいて、調査団の編成等々諸準備を進め三月下旬に発掘調査を行なうことで二月一八日付で文化庁長官あて発掘調査の届出をした。三月下旬を調査時期として設定したのは調査員の先生活の都合で、学年末の休暇中がよからうということからであった。ところが調査実施の直前に至り、事情があつて、さきの発掘届けを取り下げざるを得なかった。（ふりかえつてみるに三月下旬は天候不順で、もし実施したとしてもかなり難渋しただろう……）諸態勢をととのえ、四月下旬～五月上旬の休日をあて発掘調査を行なうことで再出発した。

二 調査団の構成

今回の茶臼峯とりで跡緊急発掘調査にあたっては、遺跡の発掘調査に加えて、地形・地質・動植物についても調査をする。総合調査団を構成した。

茶臼峯遺跡総合調査団の構成

- 調査責任者 土屋 忠男 中野市教育委員会教育長
 調査顧問 金井喜久一郎 信濃史料刊行会編纂委員・長野県文化財専門委員
 金井 汲次 長野県教育委員会事務局文化課文化財係長
 中野市文化財専門委員・日本考古学協会員
 田川 幸生 中野小学校教諭・日本考古学協会員
 小野沢 捷 中野市農委委員会事務局・長野県考古学協会員
 高橋 桂 飯山北高等学校教諭・日本考古学協会員
 関 孝一 須坂園芸高等学校教諭・日本考古学協会員
 松沢 芳宏 日伸精機社員・日本考古学協会員
 中村 二郎 南宮中学校教諭・日本地質学会員
 青木 広安 中野小学校教諭・日本地理学会員・長野県考古学協会員
 山田 拓 中野小学校教諭・日本生体学会員
 金井 正彦 界中学校教諭・長野県考古学協会員
 金井 文司 小布施町教育委員会事務局
 山上 右八 山ノ内町文化財調査員・長野県考古学協会員
 榎原 長則 中野市史料自営・長野県考古学協会員

調査員 畔上 秀雄 山ノ内町文化財調査員・長野県考古学協会員

調査補助員 中野市教育委員会事務局・北信土地改良事務所・中野市役所典政課

協力者 池田 実男 外二十七名

事務局 中野市教育委員会事務局社会教育係

三 発掘経過

四月一三日(土) 調査員のご参集をいただき発掘調査打合せ会を市役所に開く。現地調査のうえ四月二七日から始め、最終日を五月六日とすることをきめる。現地踏査のとき土取り予定地に隣接する民間の土取り場で須恵器片を発見、発跡があるかも知れないので土取りを中止してもらった。發跡調査と並行させることとする。



第14図 砦内の土塁付近での休けい

四月一七日(水)

一九日(金) 北信土地改良事務所、市典政課技師により、發跡一帯

の測量を行なう。(平面・縦・横断)

四月二〇日(土) 書類を完備し緊急発掘屋を出す。

四月二七日(土) 晴 午前中に天幕を設営、発掘用具等を搬入する。午後から作業(附近一帯の清掃、あとかたづけ等)を始める。

四月二八日(日) 小雨のち晴 三角点移転後の穴(三等三角点885.6)があったが土取りのため南約二百メートルの松林の中へ移す)を中心に土塁の構築の様子(断面)を測る。そのほか土塁内部の平坦部の発掘を始める。古釘・陶器片・瓦片・濠鉢片を発見、遺物は少ない。

四月二九日(月) 晴 前日に引き続き発掘作業本格化する。休日につき調査員・作業員とも前日を上まわる。陶器片・古釘見つかる。ピットも見つかる。

四月三〇日(火) 北側の土塁の裾から骨二本発見、人骨か?と色めくが骸骨とわかる。宋銭出る。平日のため作業員少くあまり作業すまず。

五月一日(水) 土塁北西すみから宝篋印塔の一部を発見。この日は他に遺物なし。前日同様調査員・作業員とも少数なり。

五月二日(木) 前日宝篋印塔が発見された近くから五輪塔の一部、古釘・鎗形土器片見つかる。

五月三日(金) 休日のため調査員・作業員とも多く、作業もおおいに進む。鉄砲銃弾(鉛玉)発見され作業も一段と進む。発掘が進むにつれてピットもあちこちで見つかる。夕刻までに鉄砲銃弾五個、古釘二本。とりて陸下方の曲輪状遺構の平面・断面を測量す

る。(曲輪状遺構は土取り予定地に隣接するが、その姿をとどめる)

五月四日(土) 土塁南西すみ外側から白骨片見つかる。最初は小動物のものかと思われたが調査が進むにつれて人骨、しかも火葬骨らしいことが判明。また火葬墓から古銭も出る。土塁内外の調査もほぼ終りに近づく。

この日から放塚の調査に着手する。中央部のピット、周囲からは斜穴ピットも発見される。

五月五日(日) 発掘調査も最終段階を迎える。午前中小雨はらつく。作業への影響まったくなし。前日発見された人骨の下層から骨つぼ出る。人骨も多く出てくる。このため急ぎ報告を用意し、作業員の池田さんの管若心証で供養をする。

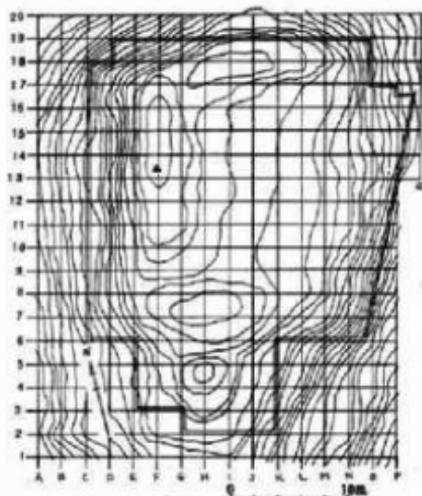
夕刻からドーザーショベルを導入、東西・南北二条の溝を切り、断面の調査を行なう。作業員の手による調査はこの日で一応終了。

五月六日(月) 最終日。前日に続いてショベルによる断面の調査。午前で調査完了の予定だったが夕刻までかかってしまふ。午後天幕・用具類の撤収作業をはじめ。夕刻全作業を終り慰労会を行なう。作業員は市教委事務局長職員のみ。

六月二七日(木) 発掘報告書作成打合せ会。午後三時、市役所第一会議室。

このように調査は五月六日をもって今回の緊急発掘調査はすべて終了した。この間、晴天続きで、きわめて順調に発掘調査が終った

第15図 特調査のグリッド(二重線付)



ことは天の恵みであるとともに、諸先生方のご指導ご尽力の大なることを思い紙面をお借りして厚く御礼申し上げます。

陽気の良い四・五月の連休をフイにした若干の未練は残ったが、汚染田の排客土事業が計画どおり完工、美田と化し、稲穂が黄金に波打ち、このほど無事に稲刈りも終えたと聞くに及んで、緊急発掘調査さらに各専門分野を加えての総合調査の記録保存が完成し、これにまさる喜びはないこのころである。

関係の皆さんに重ねて御礼申し上げます。

(事務局 町田 啓久)

第三節 茶臼峯の碧遺構

茶臼峯の碧遺構は、馬蹄形の土塁をめぐらした遺構と、その南面に連なる放塚及び、東側の通路を通した下段の曲輪状遺構よりなる遺跡である。



第16図 碧と地形

一 馬蹄形土塁をめぐらした碧

馬蹄形というと、いかにもまとまった感を与える。しかし北面・西面・南面の各土塁の接続面がくびれており、各面の中央がやや高く細長い土塁である。

さらに規模や状態について説明を加えるならば、各面の土塁内部を基準とすると、高さはそれぞれ最高部の中央で約〇・七メートル・由は約四メートル・土塁の長さは南北それぞれ約一六メートル

ル。西面はやや長く一七メートル（土塁の切れ目は除く）となっている。このうち北面と西面は、東方に向かって、自然の急斜面とつながり土塁は終る。南面は竃塚に接し、自然の尾根がやや下りぎみに、南の草間丘陵へゆるやかに伸びている。

土塁がこのような形状であるのは、築造後一時期に、他の目的によって切りくずされたためであって、初期の段階では、きまりのよい馬蹄形をした土塁であった。それは土塁の断面をみるることによって認められ、また後の墓跡遺構によって切りくずされたためである。この点については、竃の構築や墓跡遺構の項を参照することとする。したがって現状は、切りくずされた西面の土塁の両端附近が、特にその形状がくずれており、末端に至るまで乱れている。

また東面には土塁がみられない。これについて述べると、ここはやや起きを異にしている。土塁はなく中央やや北側から、曲輪状遺構に向かって、くの字形に通路が作られている。この通路は、発掘調査し断面を切つて調べた結果、土塁内から東側へ下る通路であることが確認された。その通路の両側は、急斜面を作り、下段の平地状の山林や果樹園へ通なっている。

土塁内はほぼ平坦であるが、東南の方向へ若干の傾斜をもっている。
(田川先生)

二 土塁上及び土塁内のピット

土塁内外のピットをみると合計八八にのぼる。大変多い数である。(竃塚のピットを除く)このうち特色あるのは、土塁の北東部

第17図 竃のピットを中心とした遺構



の隅から、土塁のない東側の斜面上を通り、東南部の土塁先端に点在する斜穴状のピットである。ピットの先端が土塁内部に向かって

第5表 土壘及び土壘内のビット

番	直 径 (cm)	深 さ (cm)	斜 穴	番	直 径 (cm)	深 さ (cm)	斜 穴	番	直 径 (cm)	深 さ (cm)	斜 穴
1	5×5	7	○	35	13×13	10	○	69	20×25	30	○
2	10×10	10	○	36	12×12	12		70	15×15	20	
3	10×8	10	○	37	10×10	18		71	18×18	22	
4	10×10	10	○	38	32×20	55		72	25×25	30	
5	18×18	35	○	39	45×40	25		73	17×15	30	○
6	14×14	37	○	40	8×8	8		74	40×35	30	
7	30×30	50		41	11×11	25	○	75	15×15	20	
8	30×30	20		42	10×11	24		76	20×20	40	
9	10×10	20		43	10×10	24		77	9×9	15	○
10	25×25	57		44	11×11	20		78	13×13	20	○
11	15×15	28		45	10×8	20		79	9×9	20	○
12	15×15	30		46	10×10	20		80	18×18	30	○
13	20×20	50		47	14×14	28		81	11×11	30	○
14	23×25	40		48	20×16	24	○	82	12×12	20	○
15	10×10	14		49	10×10	10		83	11×11	30	
16	23×27	46		50	11×14	20		84	12×12	20	○
17	20×20	33		51	18×18	12		85	10×10	20	○
18	20×14	20		52	11×11	20		86	7×7	13	
19	10×10	12		53	17×14	15		87	10×11	20	○
20	25×22	46		54	10×12	15	○	88	10×13	13	
21	14×14	20		55	10×10	10					
22	17×16	20		56	10×10	10					
23	14×14	30		57	10×10	12					
24	17×16	20		58	10×10	6					
25	20×20	30		59	12×7	21					
26	17×16	20		60	20×15	23					
27	17×15	30		61	35×30	35					
28	10×15	17		62	20×11	11					
29	10×15	30		63	20×20	10					
30	10×25	30		64	7×11	17					
31	12×10	8		65	18×15	30					
32	10×12	25		66	30×30	60					
33	10×8	16		67	20×20	15					
34	10×16	16	○	68	18×18	50					

また土塁上も様々で、塁上及び内外の壁にも多数ピットを見かける。東斜面のような、斜穴状のものはごく少ない。

土塁内部は、大小様々のピットであるが、特に北面の土塁近くの位置に集中し、南面土塁に行くにしたがって数を減少する。

このように本遺構の場合少なくとも、土塁内のピットと土塁上のピット、そして東側斜面状のピットに分別して考えることができる。

そのうち内部のピットは、一応建築物との関連においてとらえてよいであろう。市内新野の小曹塚城跡にみられる焼失した山城には、その柱の焼けた状態と、柱穴を見いだすことができる。本遺構はこのような焼失物は発見されていない。建築物と切り離すことのできない出土物として、この西北のピット状遺構を中心に多数の金属性の角釘が発見されている。ついでであるが、明治一二年の草間村誌の云う烽火台が、永禄の戦いで焼失したとある。しかし今回の発掘では、それを実証する資料は全く発見されていない。

多くの城跡に、建築のため礎石としての配石遺構がみられるが、ここでは見ることができない。岡谷市小坂城跡の如きは、配石遺構が歴然としてみられ、本遺構のような多数のピット状遺構はみられない。

つぎに土塁上及びその壁部のピットであるが、ほぼ直立して所在しているのに対して、東面の斜面上では、斜穴状をみる。このことは土塁の所在するところと、土塁のない部分を意識した磐の守りではなからうか。ここでは柱状または杭状のものを地中に埋め、地上

部は橋状に展開するものと思われる。その場合土塁上は直立した櫓で、東面の斜面上は磐の外に向かって斜めに並列させた状態になる。

(岡谷市史)

三、曲輪状遺構

東側の通路状遺構を下っていくと、約二〇米のところの雑木林の中に、自然の平地状遺構に至る。ここは今回の調査の対象にはならなかったため、発掘調査を行なわなかった。しかし現状を観察する限りでは、通路によって土塁内と連絡されている。これを曲輪状遺構とした。東西約一メートル・南北約九メートルの不整形の隅丸方形の遺構である。この遺構は以下自然の山林にはいり、平地状の果樹園に連なる。

(岡谷市史)

四、管遺構の構築について

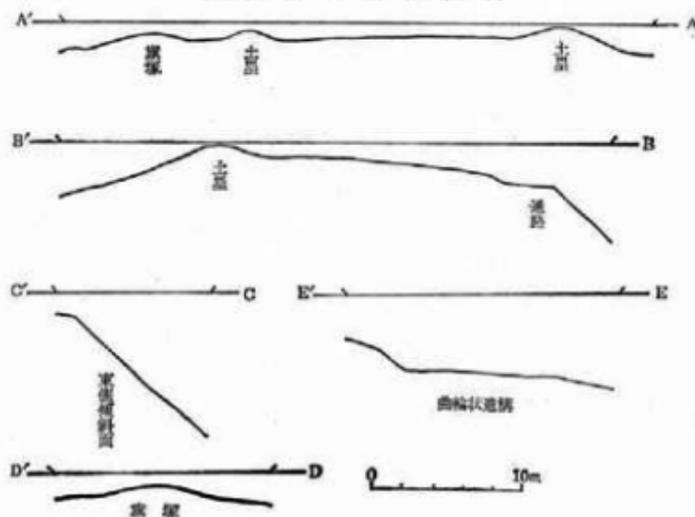
発掘調査の最終段階で土塁や曲輪の構築の関係をつかむために、管本体の東西方向・南北方向にセクション・トレンチが設定された。

本稿では第19図に掲げる測図を参考にして管遺構の構築過程を調べてみた。

○

まず東西断面(第19図(2)―1)については、大別して西端の土塁部分、次に中央の削平地、そして東端の斜面に移行する部分の三者がそれぞれ異なった層序を見せているので、土塁部分から順に詳述

第18図 磐の断面図(1)

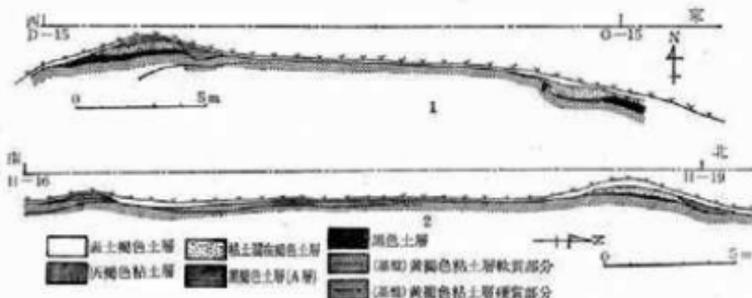


してみた。
土層部分、第一層(表土)は褐色の軟らかい土層で、平均十センチ堆積している。

第二層は灰褐色粘土層で約二〇センチの厚さをもって第三層の上部にレンズ状に堆積し、第三層は粘土混在の褐色土層で約三〇〜四〇センチの厚さで同じく第四層の上部に水平に堆積している。これら第二・第三層は粘土層の中に黒褐色土が混入したり、褐色土の中に粘土粒子が混入したりして、全体が攪乱をうけていることがわかる。つまり第二・第三層は人為的な盛土と考えられるもので、土層の主要構築土をなしている。第四層の黒色土層は一五センチ〜二〇センチの厚さに堆積していて、水分の多い土層である。これは下層が粘土層となっているための現象と考えられ、第19図では表示できなかったが、西端の表土と接する部分においては、次第に

第19図 磐の断面図(2)

1・2



水分の度合が少なくなり、かつ黒色の度合を減らして来た。この黒色土層は東傾斜面の基盤粘土層上層にも見られ、また、南北断面(2)―(2)北端の土塁下の基盤粘土層上層にも見られることから、土塁構築以前の表土と考えてよいものと思う。

第五層黄褐色粘土層は洪積世に堆積した粘土層と考えてよいものであるけれども、火山灰降下によるローム層としてよいものであるかどうか、以前から問題視されているものである。この点については地質の項で述べられているので、参考にされたい。粘土層は上部が軟弱、下部が硬質となっている。

なお、この粘土層の下層、数メートルに亘って粘土層や砂礫層が存在するが、これについては同様に地質の項で述べられているので、考古学上この第五層以下を基盤としてあつかいたい。

以上、土塁下に水平に堆積した各土層について記述したが、別に第19図A層とした黒褐色土層の存在もある。土塁東端の表土の下部に堆積していて、第三・第四層と接し、また第五層の基盤粘土層がやや傾いた面に堆積している。

この解釈については、後世、土塁上部の土砂が流出して土塁の裾に堆積したものと考えてよいだろう。土塁構築の当初、土塁は現状よりも若干高く、そして斜面も急勾配であったと想像される。

遺構中央の削平地では、表土の褐色土層が約十センチ堆積し、以下基盤粘土層となっているのみであった。粘土層の表面は東に向って緩く傾斜していた。

次に、東端の斜面にかかる部分については北東方に存在する曲線状遺構に通ずる通路となっていたであろうためか、他と異ってやや複雑な層序を見せる。

ここでは第四層の黒色土層と第五層の基盤粘土層を切つて、幅約二・五メートル、深さ四〇センチのU字形の落込みと径二〇センチ、深さ三五センチの斜行するピットが観察された。

U字形上の層序については、第一層、表土の褐色土層が約二〇センチ、第二層、粘土混在褐色土層(投乳層)が約四五センチ、第三層、純粘土層約五センチとなっている。第三層はU字形の底部に堆積した土層で、基盤の黄褐色粘土層とはシャープな線をもって画されていて、両者の間には漸移層がない。つまり、U字形は人為的なものと解釈してよいのである。現在もこの落込みに対応するものとして、地表面に北東方の曲線状遺構に通ずる僅なくぼみがあり、壱の構築当初、壱中心部から曲線状遺構へ通ずる通路があったことが想像される。

なお、U字形を覆っている第二層粘土混在褐色土層はU字形外の斜面下方へも延びていて、断面の東端部では黒色土層の上部で、表土(二五センチ)の下層に約二〇センチ堆積していた。この粘土混在褐色土層は当断面地点より南方へも延びており、ここでは傾斜面を大量に被覆していて、壱の東端部の平地と急斜面の構築土ともなっている。当地点のこの粘土混在褐色土層も壱の構築土となっていた可能性もある。とすれば、ある時期にU字形が掘られ、またある時期にU字形が埋め戻された可能性があるわけであるけれど

も、一地点の層序のみでそこまで類推するのは危険であるので、U字形の落込みが確実に存在することから、ある時期に北東方の曲輪状遺構へ通する通路があったという程度に止めておきたい。

次に南北断面(第19図(2)―2)について、南端の土塁部分から記述しよう。まず第一層として表土の褐色土層が一〇センチ、第二層は粘土混濁色土層で約一五センチと二〇センチ地積し、第三層の基盤粘土層へと続いている。

土塁内側の削平地では、東西断面と同様に表土の次がただちに基盤粘土層となっている。表土の厚みは場所によって違い、土塁に近いところで三〇センチ、中央部分で一〇センチとなっている。

北端の土塁では第一層の表土が約三〇センチ、第二層粘土混濁色土層が約三〇センチ地積し、以下、基盤の黄褐色粘土層へと続いているけれども、部分的には第二層と基盤粘土層との境に、黒色土層のバンド(厚さ約一〇センチ)を挟んでいる。これを第三層とする。なお、土塁北端の裡には東西断面でA層とした黒褐色土層が表土の下層に堆積しており、土塁上部の土砂が流出したものと判断できよう。

以上、各断面の細部について簡単に記述してきた。ここで、それらの観察を基にして遺構全体の構築について考えてみよう。

まず、第19図に表わされているように、土塁の内側では基盤粘土層の削平が見られる。これについては、土塁下の基盤粘土層よりも土塁内側の粘土層の方が、やや高さが低いこと、また土塁基部の断

面に明らかに基盤粘土層を切りとった痕跡が観察されることで納得がゆくと思う。

削平された土砂は削平地の南側・西側・北側をめぐる土塁として積まれたり、東側の斜面に張り出されて、本郭の拡張が行なわれたりした。

次に、遺構が構築される以前の地形は、竃塚の存在する付近の現地形のように、馬蹄形土塁内地点を頂にした馬背状の地形であった



第20図 土塁の構築を調べるためブルドーザーによる切り割り作業

ことが想像されるが、後の削平地面の高さからは、最も高いところで八〇センチを越えていなかったものと思われる。このことは削平地の中央部分においても、粘土層の硬質部分を欠いていないことから容易に判断

できる。土塁の構築に使われた土砂の大半は中央の削平地から運ばれたもので間に合わされたと思うが、他地域からの若干の補充も考えられるところであろう。

以上、当磐跡の構築にあつては、石材の使用が見られず、単に土砂を削平したり、盛土したりしているのみの簡単な構造であることが発掘の結果判明した。

(松野芳雄)

五、塚

この遺構は、三角点(三八九・九メートル)から南南西一六メートルに位置し、磐跡西側土塁の外側一・八メートルの所に所在していた。標高三八九メートルである。茶臼峯丘陵の稜線に、磐跡から西の山林中に二五二・二八メートルのほぼ等間隔に四基点在し、信濃史料考古篇には、古墳と記載されていた。

そのうち三基は昭和三八年秋実施された中野市農業構造改善事業

第六表 茶臼峯の古墳

名称	所在地	直徑	高さ
茶臼峯一號	茶臼峯一〇三・一	六・六尺	〇・四尺
二號	一〇二・九	五・五尺	〇・四尺
三號	一〇二・六	五・六尺	〇・四尺
四號	一〇二・六	五・四尺	〇・三尺

本遺構第一号古墳とされたものにあつては、

の開設前に記録保存のため緊急発掘調査によって消滅した。遺構調査の概要は、次のとおりである。

発掘調査は磐跡の究明に全力を注ぎ、その全貌がほぼ把握された段階、すなわち五月三日から六日までの四日間に亘つて実施した。

五月三日(金) 晴

午後から発掘着手。まず、落葉を掻き、次いで雑草を除去すると土盛りの遺構があたかも土撥頭形に鮮明になった。表面より五センチ刺ぎとる作業を実施した。全体の三分の二を除去した。

五月四日(土) 晴

六名で昨日の作業を継続。全体に粘質の赤褐色土層があらわれ、中心部に径二〇センチのビットの跡を検出した。調査を進めると、このビットを中心にはほぼ円形に多数のビットがめぐっていることがわかった。また、その下方にも幾つかのビットが点散していることが判明した。遺物は鉛製の銃弾一個を得た。

五月五日(日) 小雨時々晴

ビット群を明確にし、塚線構築の層位確認のため、中心ビットを基点に東西に長さ一三メートル、幅四〇センチ、深さ五〇センチのトレンチを入れた。マウンド上の第二層はビットを中心に東西一メートル、深さ二五センチぐらいで赤褐色を呈し、第三層は褐色で東西六メートル、深さ二〇センチ、以下地山は粘質の褐色土であった。

五月六日(月) 晴

遺構確認のため南北に長さ六メートル、幅三〇センチ、深さ五〇センチのトレンチを入れた。中心ビットのまわり二メートル内は土

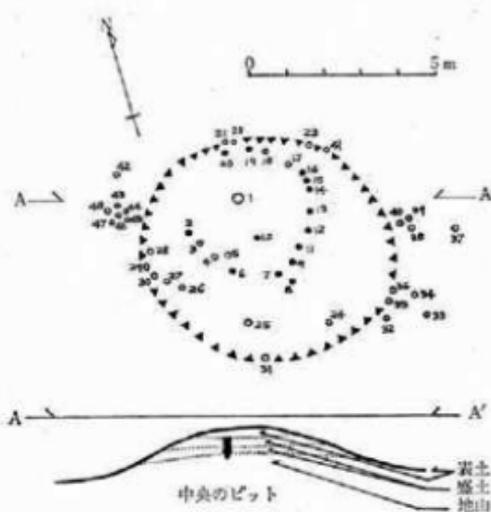
盛りがなされたことが考えられた。第二層はピットを中心に長さ二メートル、深さ二五センチ、第三層は、褐色で長さ三メートル、深さ二〇センチで、中心ピット北は、松の切り株のため時間的余裕のない発掘調査のため確認することはできなかった。

塚塚は高さ〇・六メートル、東西径一二メートル、南北径一〇メートルの土盛りで土砂頸状を呈し、一見小内墳を思わせるものであった。関東地方に多い所謂軍布塚状のものであったために信濃考古総覧に古墳と記載されたものであろう。

表土は三センチで灰黒色を呈し、腐植質を多量に包含していた。第二層赤褐色で約二五センチ、第三層は褐色土層で、以下は豊野層の自然のままの地山で、粘質の強い褐色土であった。地山の上に付近の土盛りをしたものと推定された。

遺物は銃弾一個のほかは何物も検出することができなかった。塚塚からの遺物の出土例として、中野別荘地越しにみえる山ノ内町の菅城の塚塚からカワラケの小破片の出土をみている。

遺構は多数のピット群を検出することができた。(第21図) 中心部のピットは径二〇センチ、深さ七七センチで下方へいくにしたがつて細くなり杭状のものであった。これをめぐって円形に一〇センチ前後のピットが一八個検出され、深いものは四〇センチ、浅いものは八センチの杭状のもので先細りのもので樺杭を打ち込んだものの如くである。そのうち一二個は杭先きを内側に向けているのは興味深い。それは中心杭の敷草を支える支柱の機能を持っていたのではあるまいか。



第21図 塚塚のピットと断面図

円形ピット群の外側にも三〇個のピットが点在していた。このうち三個のピットは二四・七〇センチの深さに打ち込まれ、ほぼ三角形の位置から敷草を支えたと推定するにふさわしいものであった。

四月三日調査を參觀された丸山亨一氏(安楽寺)は、所有地山林(茶臼峯五三〇番地)昭和三八年の秋、共同開墾の時に宝篋印塔が出土し、畦畔に置いたが何者かに持ち去られてしまったこと。岩跡東北一五〇メートル付近に塚塚と思われる土盛遺構が二番掘土業者によって消滅したと語られた。

茶臼峯特跡を中心にその両翼の稜線上に塚塚が幾つかあったもの

第7表 旗塚のピット

番	直 径 (cm)	深 さ (cm)	斜 穴	番	直 径 (cm)	深 さ (cm)	斜 穴	番	直 径 (cm)	深 さ (cm)	斜 穴
1	21×20	77		17	12×11	12		33	13×12	10	
2	11×12	12	○	18	12×9	22		34	10×10	20	
3	10×10	10		19	10×10	11	○	35	10×10	10	
4	8×8	10		20	7×8	15	○	36	10×9	13	
5	10×10	8		21	12×10	36		37	15×13	20	
6	9×14	19	○	22	14×14	25		38	18×18	10	
7	10×12	17	○	23	14×10	24		39	10×12	10	
8	9×11	13	○	24	9×9	15		40	10×10	11	
9	10×10	11	○	25	20×18	20		41	11×11	12	
10	10×11	10	○	26	10×10	8		42	9×9	12	
11	10×10	11	○	27	10×10	10		43	13×19	28	
12	10×10	10	○	28	13×19	28		44	25×15	40	
13	10×18	20	○	29	10×10	18		45	14×13	28	
14	10×9	13	○	30	10×10	10		46	10×7	13	
15	12×9	22	○	31	12×10	7		47	10×7	15	
16	11×11	20	○	32	10×12	15		48	10×11	22	

と推定される。

(金井文司)

六、碧遺構のまとめ

土盛遺構は今回の調査で明らかにされた。これは民俗の信仰でもなく、古墳でもなかった。碧に附随する墓塚であった。第一にこれは塚の中央にすぐれた大きなピットがあり、それが支柱となつてゐる。その回りに小ピットが円をえがいて、二重・三重に回つてゐる。今回の調査は、広くその周辺にまで発掘が及ばなかつたが、あるいは四重・五重のピットが存在するのかも知れない。

とにかく周辺の多く所在するピットは、支柱をつつための杭の穴であろうと判断する。明確な答えは、今後の多くの事例に期待したい。

しかしこのような旗塚状遺構は、この碧より展望できる中世と推定される菅城(山ノ内町)や、壘田城(中野市)等の山城にもみられ、これら関係の解明の糸口を得たとも言える。出土遺物も銃弾一個にすぎないが、前述の如く旗塚からカラケの出土例も他にあり、馬彫形土皿と同一時代の遺構とみることができるともいえる。

また曲輪状遺構は、前述の如く通路状遺構に

よって結ばれていると判断される。このように馬蹄形土器の開いた面に、通路を持つ事例は明らかでないが、新潟県新井市の松原館⁽⁴⁾は、茶臼家の如く低い丘陵上で馬蹄形の土器をもっている。しかも居館跡の位置は、この曲輪状遺構にあたる位置にある。年代は中世前半期の築造と考えられている。このようにみていくと、個々の面において類似点がある。しかしながらこの曲輪状遺構は、厩館跡とみることはできない。物質集積所・小建遺物・腰曲輪等いろいろ予想されるが、今後の調査結果にゆだねたい。

ここで磐全体の構築年代を推定しておく。それは先の松原館の如き類例からすると、これに近似するように見られやすい。しかしより科学的な方法としては、出土遺物や遺構等の関連に求められる。そのうち最も年代判定の資料となり得るのは古銭であろう。そこで土器内で得られた古銭のうち、寛永通宝は智跡とは無関係で除くこととする。すると最も新しい古銭は元符通宝(一〇九八〜一一〇〇)である。さらに土器を切りくずして作られた、火葬墓中の最も新しい古銭は洪武通宝(二三六八〜二三九八)である。したがって元符通宝の使用された頃から、洪武通宝の使用された年代以前となる。仮りに伝世期間を百年とすると、一三世紀から一六世紀という幅広い年代となる。そこで年代をさらに集約してみるならば、土器の切りくずして作られた遺構の火葬墓には、土器内の遺物の混入が非常に少ない点に着目すべきである。また本稿の茶臼家周辺の史的環境よりみよう。これにより元符通宝使用の年代よりも洪武通宝の使用年代に近いと判断される。したがって先の松原館とも比較的近

似する様相をもった、中世中期の室町初期の前後の年代に推定されよう。
(田川幸生)

註1 榎原長周 昭和二五年頃、中野市新野小曾屋城の实地調査による。

2 田川幸生 昭和四九年九月、岡谷市小坂城金蓮原城実地調査による。

3 田川幸生 昭和三六年五月、下高井郡山ノ内町管城(更科跡南側)の

遺城より中世のカアラケ片を採集した。

4 加藤智平 「中世の石塔と城館址」新井市史 上巻 新潟県新井市 昭和四八年三月

第四節 磐内の出土遺物

一、石器・石造品

有柄石鎌

火葬墓近くで見えされたが、火葬骨と共存したわけではない。長さ三センチの有柄石鎌であるが、中央の柄の部分が欠除している。粘板岩で作られており、当地方では縄文の末期から、弥生時代にかけて多く見られる形態である。近辺に弥生時代の栗林・安源寺・草間中祖・高屋敷の遺跡がある。なお有柄石鎌一点が遺跡近辺の尾根で採集されている。

宝篋印塔―笠の部分―(第25面―1)

北西の土器外壁から出土した。笠の部分だけの出土で、他の部分は発見されなかった。高さは二三センチである。安山岩質の石塔で、全体をていねいに研摩されていて、幾何学的美しさがある。戦



第22図 砦内出土遺物の位置

国時代の様相をもっている。(詳細は供養塔の遺構・遺物参照)

五輪塔—地輪の部分—

空黄印塔の近くで発見された。地輪の部分だけの発見である。縦二一・七センチ、横二一・一センチ、高さ一七・一センチである。安山岩質の粗雑な加工で切石状をなす。(詳細は供養塔の遺構・遺物参照)

帆 石

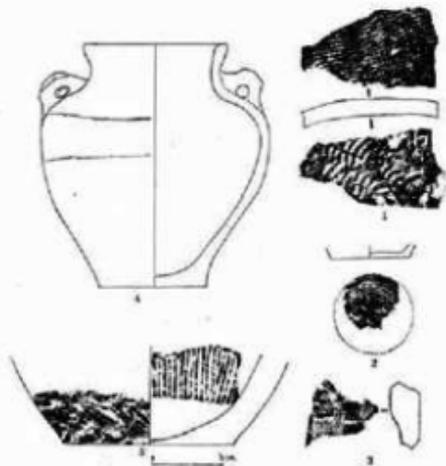
柱状と平板状の小石片である。共に機械加工による残痕のすじが残っている。近代の小学校で使用した石盤であろう。(田川幸生・小

野村慶)

二、土器・陶器

須恵 器

土塁内三角点附近を掘り割った際発見された。(第23図—1)土塁構築の際埋まったと推定され、地中七〇センチの深さである。表面に縄文の文様を附し、内面に青海波の文様のある破片である。もう一点底部の破片が発見されている。土塁内東側からである。底部の径約一一センチあり。口クロがかかっており、胎土、焼成はよい。



第23図 砦内出土遺物(1)—土器

そのほか土器外で、青海波文様・節目の波状文・窯澤等十数点採集されている。これらは草間高塚跡出土遺物と関連が深い。

土師器 (第23図—2)

国分期の糸切皿底部である。胎土、製成も比較的よい。なお遺跡の近くの尾根で、時期は異なるが土師器実形が採集されている。

布目瓦 (第23図—3)

平瓦であろうか。表面は平板状をなし、内面は若干波状の小破片の布目がある。褐色をなしている。脚接の安源寺や池田から出土の布目瓦は須恵質であって質が異なる。平安時代まで下るか。

須恵質土器

襦鉢底部 (第23図—5)

土器内と土器外壁の供養塔附近に分散していた土器片を、接合して復元した。底部は一二センチで高さは破片のため不明である。全体が灰青色をなし粗悪な作りで、表面には大きなひび割れがみられる。内部は襦鉢特有の縦の掻き目になっているが目が荒い。内底部は横すじに変わる。内底部の中心部が低く薄く、炭化物が附着している。制作技術が不良であるにもかかわらず、胎土製成は比較的良い。

中世の遺跡からは襦鉢の出土例が比較的あり、近例として市内安源寺、山ノ内町上条の遺跡からも出土している。全体として粗雑に作られ、鉢内の掻き目が荒いのも特色である。

双耳骨壺 (第23図—4)

火葬墓より出土した須恵質の土器である。高さ一七・一センチの

壺の両肩部に耳を持つ骨壺である。(詳細は火葬墓の項参照)

土師質土器

鍋形土器 (第25図—2)

襦鉢底部と同様に破片が土器内部と、土器外壁の供養塔出土附近に分散していた。これら二四片を集めて図上復元をした。かなり大きな土器で、推定底部で経四〇センチ、口縁部で五四センチ、高さが二〇センチに及ぶ。口縁上部は一般的には丸味があるが、この土器は平らに切られ、内外共に口縁直下で中へくびれている。このように口縁上が平らな例は、市内日野小学校出土の内耳土器や上伊那樋口内城館跡出土の鍋形土器にある。しかしくびれ状となる例は不明である。全体的には厚手である。しかし底部へ行くにしたがい薄手となり、また底部でも中心部へ行くにしたがい、さらに薄手となる。内耳部分の破片の発見はなかったが、底部は内耳土器質の砂質でざらざらしている。側面はなめらかで、表面は黒褐色であるが、胎土は茶褐色である。

カワラケ

小破片一七点を採集した。小破片はおほじき大のものが大部分で、形状は不明である。褐色をなし、非常にもろい。

中世陶器

壺状の口縁部破片が土器内より出土した。小破片であり、しかも小形である。緑灰色をなす釉による光沢がある。ひび割れとなっていない。

近代陶器

土壘の末端部から、黒色鉄軸の壱形陶器が出土した。薄手で焼成もよい。近代の機械生産によるもので、美しく作られあげ底となっている。下底部に年輪状に凸状の円がえがかれている。底部附近にも三条の凸状の帯がえがかれている。下底部には「 \square 」と「 \square 」の土器記号が、凸状に印され、さらに軸による「 \square 」の印もある。これは土中より発見されたと言うよりは、木の葉を取り除いたら置かれていた破片が大部分である。

土壘内から発見されたのに湯呑茶碗一こがある。商店のサービスピ品とみえて、「黒口醬油店」と書かれている。これは中野市西町に昭和初期に存在した、黒岩商店であるらしい。

(田川幸生)

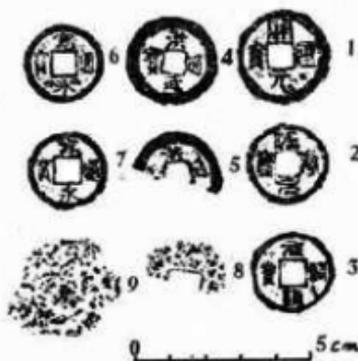
三、金属器・金属品

第八表 碧内出土古銭

銭名	王朝名	铸銭年代	西紀	出土数	出土位置
開元通宝	唐	武徳四年	六二一年	1	火葬墓
熙寧元宝	宋	熙寧元年	一〇八七	1	土壘上
元符通宝	宋	元符年間	一一〇六—一一一〇	1	土壘内
洪武通宝	明	洪武年間	一三六八—一三六八	2	火葬墓
寛永通宝	日本	江戸時代	一六〇〇—約一七〇〇年間	2	土壘内
不明	火葬骨と共に焼淨化したため不明			2	火葬墓

古銭(第24図)

出土した古銭は上の通りである。



第24図 碧内出土遺物(3)古銭

よい。そのほかの古銭は、碧内係遺構の年代決定の重要な役割をはたしている。

銃 弾

発見された銃弾を示すと第九表のようである。

いずれも鉛製であって、表面が灰白色に変化しているが、傷口を入れて内部をみると銀光色を呈している。完形品と部分のものがあるが、使用後のものと考える。直径はほぼ一・二センチであるが、重量はまちまちである。同じような球形であるが、一こ一こ形状を異にする。発見位置は土壘や燻塚などの、比較的高低の変化はげしい位置より出土している。このような発見状態や弾形からして、近代の所産ではない。本邦へ種子島に鉄砲伝来以後の使用とみ

このうち最古のものが開元通宝であって、新しいのは明治初期まで使用された寛永通宝である。このうち寛永通宝は江戸時代以後の所産であり、碧との直接の関係はないとみて

第九表 岩附近出土銃彈

番号	部分	重量(g)	直径(mm)	発掘位置
1	完全	九・五	一・二	土塁附近
2	三分の二	五・九	一・一	〃
3	完全	一〇・六	一・二	〃
4	完全	八・五	一・二	〃
5	二分の一	七・三	一・二	〃
6	完全	九・四	一・二	旗塚上
7	ごく一部	〇・二	不明	土塁附近

る。

角釘

一五本の角釘が発見された。主として北西部の土塁の内外である。その附近には比較的土器片も多くピット遺構も多数見受けられる。遺構の中心的存在と考えたい。

発見された角釘は、別表の通りで使用された痕跡が十分に、曲形や笠のない釘が大部分である。比較的小さい釘が多く、先端の欠陥の釘を復元して考えてもせいぜい四〜六センチの釘が大部分である。安原寺土葬墓の明確なのが五センチであるからして、大きな建築物、木工品等は考えられない。土塁内北西部は、ピットが集中して遺物が比較的多く、釘の存在により、小建築物が予想される。

第十表 岩附近出土金属角釘

番号	長さ(mm)	先端欠陥	曲形	笠なし
1	三・八	×	×	×
2	四・一	×		
3	三・八	×		
4	二・七	×		
5	三・八	×	×	×
6	九・五	×	×	×
7	三・二	×		
8	一・五	×	×	×
9	三・二	×	×	×
10	三・六	×	×	×
11	七・五	×		
12	三・〇	×	×	×
13	六・〇		×	×
14	三・五	×		
15	三・三	×		

不明鉄片

土塁内より不明の少破片の鉄片が発見された。種類や用途は不明

である。

九 釘

三角点附近から発見されたもので、笠が一・一センチ、長さ二〇センチ、太さ〇・六センチの丸釘で、木片が赤錆状になって附着していた。三角点の標柱に関連した釘であって、土壘遺構とは関係のない近代の品である。

(田川幸生・小野武雄)

四、人 畜 骨

火葬人骨

西南の土壘の隅を切りくずしたところ、八体の火葬骨が出土した。保存状態は良好であった。細かく焼きくだかれていて、人体のどの部分かは明らかでない。

(詳細は火葬墓の項参照)

家畜骨

北面の土壘の内側に家畜骨の出土をみた。これは近代何者かによって埋葬された、馬の骨の一部である。

以上出土遺物をみるに、特に出土量も多く遺構に関連するのは、中世の土師質土器、須恵質土器、中世陶器、供養塔基、火葬墓、角釘、鏡架、中国銭などである。

(田川幸生)

註1 永本光一「石壘」佐野 昭和四二年一月 長野県考古学会

神田加登氏所有の佐野遺跡(縄文晩期)・粟林遺跡(弥生中期) 出土石器筆者実見による。

2 金井茂次「土壘遺構附記」中野市高丘の土壘・土壘遺構 昭和四〇年

三月

- 3 大川清・金井茂次「長野県中野市草間遺跡」信濃六の一
- 4 金井茂次「草間茶臼墓」中野市高丘丘陵の土壘・土壘遺構 昭和四〇年三月

5 用川幸生が昭和二六年安原寺及び池田遺跡で自ら採集及び実見

6 金井茂次「埋蔵出土遺物」安原寺 昭和四二年三月 長野県考古学会

7 金井茂次「土壘遺物」中野市日野地区表採の考古資料 高井二一

昭和四五年一月二五日

8 長野県中央道埋蔵文化財調査報告書「樋口内城遺跡発掘調査報告書」日本道路公団名古屋建設局 昭和四八年

第五節 墓跡遺構と遺物

一、供養塔

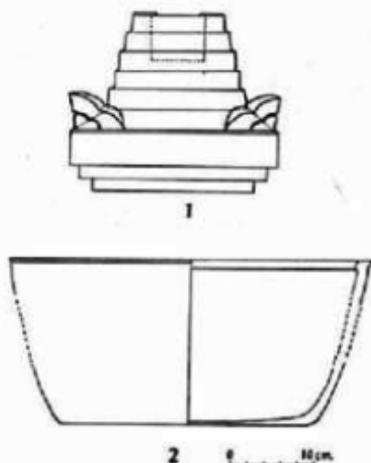
供養塔の遺構

馬蹄形土壘北西部の隅の器上から、外側の隅に向かって表土をとり、清掃したところ発見された。それは宝篋印塔の笠の部分と、五輪塔の地輪の部分であって、他の部分は発見できなかった。ここは供養塔を中心とした遺構である。

ここ北西部の隅は、自然状にくびれているが、西壁及び北壁の最高部より約四〇センチ低い。高さも土壘内部より約三〇センチの高さで、土壘から外部への通路が、作られているかのような錯覚を起こさせる。しかも土壘の外側は、隅の方向へ若干突出している。ここは発掘調査の結果、土壘構築後ある時期において切りくずしたも

のである。即ちここは土質をみるに、地山の部分ではなく、しかも土壘としては地盤が弱い黒褐色を呈する土質で、移動された土砂である。特にここが切りくずしの土砂であるという最終の確認は、遺物の整理の段階に至って知ることができた。それは摺鉢の破片(第23図一)と錫形土器の破片(第25図一)が、土壘内部と土壘外の供養塔出土附近から発見されたことである。したがって土壘の切りくずしは、土壘内の目的活動のあと、ある時期に何等かの目的によって行なわれたとみられる。即ちその目的は、二つの塔を中心とした墓跡か、それとも単なる供養のための塔が置かれたものか、それとも人の手によって移動されたものかは不明である。

さてこの二つの塔は、共に平面状に置かれたのではなく、若干の傾斜をもって置いた。一・五メートルほど離れた上方に五輪が、下方



第25図 壱内出土遺物(3)宝篋印塔笠の部分と錫形土器

に宝篋印の塔が発見された。その中間附近から錫形土器底部が置かれていた。これは塔と何等かの関連があり、墓跡遺構の一部かも知れない。

宝篋印塔—笠の部分—

全高二三センチ(中心部) 最長幅二四・五センチ(軒口部)である。笠の中心部にある隅部下の軒口部は、横幅も一番広いが、厚みも最も厚い。この軒口から上端の段級へかけて(隅部)、斜面状をなして薄くなっている。隅飾りや段級への安定感をもたせている。その上部に五段級が作られ、それが皆ほぼ等間隔で重なっている。最上部の段級中央には、径七センチ、深さ五・七センチの円筒形の凹穴がうがってある。その上部の四隅には、ほんのわずかな白部を作り、塔身部と強固に接続できるように安定をはかっている。

また軒口より下部は、二段級となって塔身へ接続をはかっている。共に軒口上部の段級よりうすい。安山岩質の石材で作られており、底部の塔身へ接続する部分を除き、すべての部分がていねいに研磨されており、幾何学的美しさである。

時代の特徴を示す隅飾りは、低く横に広がり、二弧の輪郭を作り、下の中央へさらに二弧の刻みを入れている。隅飾りはわずかながら外側に傾いている。

軒口の部分が厚いこと、全体が反りを持たない点は古式を思わせるが、隅飾りの特色や、軒口から上部の段級へかけての斜面は、北信濃出土の一般の特色をそなえている。これは何時頃ののものか、遺

構の状況からして、土器構築後、特として使用したる後と判断される。また出土遺物の様相からも考慮せねばならない。何といつても塔の時代的特色をふまえ、遺構との総合的な判断にたつならば、戦国時代末期の様相を多分に含む、偶然や幾何学的美しさに求められる。

五輪塔―地輪の部分―

縦二一・七センチ、横二一・一センチ、高さ一七・一センチの長方形をなしている。安山岩質で、表面加工が十分でなく粗雑である。他の部分が発見されていないので、細部にわたっては不明である。

茶臼峯附近の五輪塔・宝篋印塔の分布

遺跡の周辺からは、多くの塔が発見されている。発掘調査後附近で、ブルドーザーの作業中にも地輪が発見された。また遺跡の東隣りの下段の茶臼峯墓地にも多くの五輪塔を見ることが出来る。また遺跡周辺の安源寺、草間の各家庭の墓地、あるいは隣園の一部にも多く保管されているのを所見する。さらにこの遺跡を北に向かって下ると、五輪原という地字があり、附近から五輪塔を見かける。最近五輪原の東隣りの安源寺跡附近の古井戸からも、五輪塔及び宝篋印塔が多数発掘された。また筆者をはじめ調査員の多くも、遺跡附近の山中を調査中、宝篋印塔や五輪塔が山野に点在しているのに出会いをしている。このように遺跡の周辺からは、多くの五輪塔を主体とする石造物が分布していることは確かである。筆者はそのうち遺跡附近の一部分の調査をしたので、参考までに付記したい。

第十一表 茶臼峯附近の五輪塔・宝篋印塔の所在

所在地	五輪塔の部分(数)				宝篋印塔の部分(数)
	空風	火	水	地	
安源寺墓地	16	2	1	0	相輪(1)
安源寺墓地	26	5	5	1	相輪(1)
安源寺	8	2	2	0	
茶臼峯共同墓地	14	2	0	0	
安源寺	1	19	5	40	相輪部をぬき(各1)
安源寺跡附近古井戸出土	26	20	8	20	相輪部をぬき(各1) 江戸中期のもの
草間区墓地	1	10	0	3	
春原はるい氏邸宅	3	0	0	1	
草間区	3	0	0	1	笠(1)
金井汲次氏邸宅	3	0	0	1	

五輪塔は宝篋印塔と同時代の所産とみられ、これら茶臼峯附近をはじめとする、草間丘陵の石造文化の塔墓は、いずれも中世後半を主体とするものであろう。これはごく一部の断片的調査にすぎない。今後総合的見地から調査研究を進めるべきである。

(田川幸生・福重良樹)

二 火葬墓

火葬墓遺構の位置

馬蹄形土墓の北西部の隅の供養塔を中心とした遺構に対し、南西の隅からは火葬墓の発見をみた。土墓を切りくずして作られている点は類似しているが、こちらは遺物と遺構の保存状態は良好である。



第26図 写骨壺と石組内葬墓

ここは土墓の南西の隅を完全に切りくずして、土墓内部とほぼ平らにし、その土砂を土墓の外壁に盛っている。そのためその位置は土墓の外に向かつて、舌状の平面をなしている。一見通路状の様相を持ち、伝承草間氏の大久保地籍の館例にあ

り、しかも南側から尾根伝いに来るとここに至る。そんなことから火葬骨の発見までは、塔の入口と推定されていた場所である。この地点は比較的粘土質が強く、他の遺物の混入もほとんどなく、ただ弥生時代と推定される有柄石鏃が一点出土したのみである。火葬骨は地下約二〇センチの位置に八ヶ所にわたり、きわめて良好な保存状態において発見された。尸位的関係からみると同一レベル上に所在し、その範囲も巾一メートル長さ三メートル以内であった。互に重ならない程度の十センチから五〇センチの距離において集骨されていた。このような状態から、同一年代の集団火葬墓とみなされる。

火葬墓遺構と遺物

一号墓

十数個の河原石の下から、小石の蓋をした骨壺が発見された。両肩に耳を持つ須恵質の土器である。高さ一七・一センチ・胴部の最大径一六センチ・口縁部の径一〇・一センチのもので、焼成はかなりよい。胎土は荒くさらさらしており、小石も含んでいる。口縁部には若干のロタロの跡を残すが、胴部や肩部は輪すみの跡が明らかである。底部及びその附近や二個の外耳の部分は竹べらの細工の跡を残す。

火葬骨は、その内部に納められており、総重量は八九五グラムであった。若干の炭化物がまじっているが、骨片は人体のどの部分に属するかほとんどわからない状態である。

二号墓

ドーナツ形(円形)に小石が十個並べてあり、その外径は約四〇センチである。木の根がはびこり(第27図12)切り株があり若干自然に小石が動いている。火葬骨はドーナツ形の内部にあり、葬られていた。火葬骨の重量は一一五五グラムであった。

三号墓

特別な処置はせず、火葬骨がただ円形状に置かれていた。総重量七七一グラムの集骨である。はびこって来た木の根は火葬の炭化を受けていた。ここで特に注目すべきは、古銭五枚の埋葬である。一部は焼け切れており、腐蝕しているが二枚は判読できる。開元通宝と洪武通宝であって唐銭と明銭である。これは火葬墓の年代決定の有力な材料となる。間接的には骨の構築の年代決定の基礎ともなる。

四号墓

火葬骨のみの集骨である。総重量六二四グラム。

五号墓

目じるし的な二個の小石があった。総重量三四五グラム。

六号墓

円形に十個の小石があった。最大径三〇センチその下部に集骨がみられた。総重量七二七グラム。

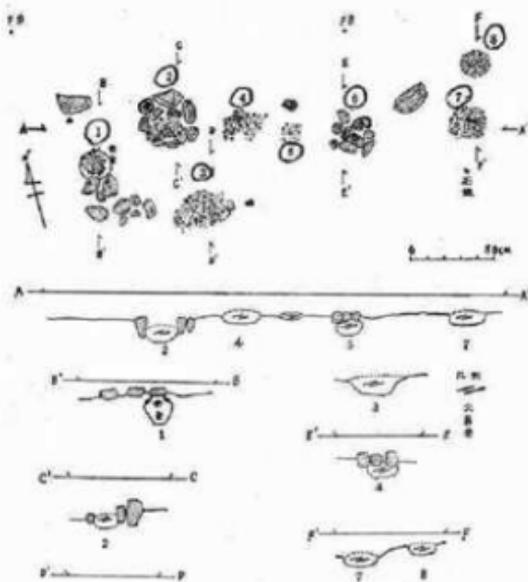
七号墓

火葬骨のみの集骨である。総重量一〇二二グラム。

八号墓

火葬骨のみの集骨である。総重量四五〇グラム。

第27図 火葬墓(平面図と断面図)



火葬墓のまとめ

以上八号の火葬墓は一様の形式を保っているのではなく、安源寺遺跡の例にならって、分類してみるならば次の三種にならう。

一類 小石を敷き集め特別の遺構をとまなうもの(一、二、六号墓)

二類 粘土の盛土により平面を作り、火葬骨の集積したもの(三、四、五、七号墓)

三類 火葬骨を容器に入れて葬ったもの(二号墓)

これらのうち特に特色あるのは三類で、数個の小石を置いた下に位置した骨壺である。これは一類にも関連するが、特に三類とした骨壺は時代と形状を異にするが、市内吉田より出土している。吉田出土の骨壺は、蓋着きの須恵器であつて、庶民のものであろうが、茶臼峯の場合は特との関連でとらえるべきであらう。

一類二類は当遺跡の東方約五〇〇メートルの安源寺遺跡に中世火葬墓の近例がみられる。埋葬方法は、一類においてはほぼ同じく、二類は若干異なる。それは安源寺においては、小石のかわりに砂利を充当させ、直接火葬骨を集積しているのに対して、茶臼峯においてはその状態はうかがわれるものの、それほど明確でない。

安源寺においては、丘陵上の斜面を土段形に掘り下げ遺構を造っているのに対して、ここは土塁を切りくずし、平面を作っている点は若干の差異があり、前者は南面を、後者は西面の地形にある。これは自然的地形から、このようにせざるを得ない。しかし兩者共に共通なのは、いわゆる崖状に近い場所である。このような一類の遺構に類似するものは古代にさかのぼっても当地方にもみることが出来る。市内小田中(中尾)、同田麦(向)原の石祖墓地がみられる。

今までの近辺のこのような火葬墓の調査においては、骨片の量が少なく、その保存状態が良好でなかった。しかし今回は保存状態がよく、その重量を測り得た。もしこれらの人骨を分骨せず、埋葬されたとするならば、一号・七号は千グラムを越えており、比較的大形の体軀を示し、一号・三号・四号・六号の五〇〇グラム以上一〇

〇グラム以下は中形の体軀である。また五号・八号は五〇〇グラム以下で、小軀または比較的幼年に位置する人の火葬骨であらう。

さて二号墓から出土した古銭は、開元通宝と洪武通宝である。これは市内厚良出土の大量の古銭の最古と最新の古銭にあたる。したがってこれとほぼ同一年代とみることが出来る。当遺跡は城跡関係の遺跡であり、その死者と共に埋葬された古銭である。かたや厚良の古銭は、大量の古銭が地中に保管されていたものであるが、問題解明のため、当時の記録と照合して考察すべき問題を含んでいる。

そこで仮りに下限の年代たる洪武通宝(一三九八)の終末期から、伝世期間を約一〇〇年とするならば、一五〇〇年(御相原天皇・将軍足利義隆)の前後とみることが出来る。しかしながら少量の古銭ゆえ、若干のあやまりがあるとも言えない。したがって総合的に年代を位置すべきである。それには、同時に出土した骨壺の形態より、他の遺跡に求めることも大切である。さらに土塁の構築された年代も求め、その土塁の一角を切りくずし、火葬墓を形成した年代を測り出すことも大切である。骨壺の同類型の事例は、特に好例がない。現在土塁構築からも推考すべきである。土塁内からの出土の時間的要素にやはり古銭があるが、そこには元符通宝がみられ、年代的には洪武通宝とかなりの開きがある。しかし土塁の構築状態から、また火葬墓遺構の混入遺物からして、両遺構の時間的差異は、比較的少ないとみられる。

供養塔と火葬墓

さてそこで供養塔を中心とした遺構と火葬骨を出土した遺構の関

連である。後者は城跡関係の墓跡として推定されるのに対して、前者は直接墓跡遺構としてつながらざる要素は、銅形土器の如く存在は、その色あいはあるにせよ、直接には人骨が発見されていない。しかし他の類例を求めらば、鎌倉市浄光明寺例の示すものに、火葬骨と五輪塔が同居している。しかしながら火葬墓と供養塔の出土状態や性格をやや異にしているからして、無理な関係判断はさけるべきである。即ち火葬墓には、土器内部からの混入物がほとんど皆無に近いのに対して、供養塔附近は混入物の多くをみることは、時代的な差異が歴然としている。

いづれにしても城跡関係の遺跡内の墓跡、あるいは供養塔であるので、当地方の戦乱とも関係が深く、特に中世後半における、中野地方の豪族との関係を考慮すべきで、本報告書中の「茶臼峯塔遺跡の史的環境」と関連をさせながら今後思考したい。

(田川幸生・時上秀雄)

三家 畜骨

北側土塁の内縁中央部附近に、雑木の切り株の下が袋状になっていた。その下部に相当量の骨片が所在した。調査の結果それは馬骨であつて、そう古くはない。明らかに現代の遺物で古くみて二、三〇年の経過をしたものである。何物かその骨片の処置に因り、この山上の切り株の下に埋めたものであろう。

(田川幸生)

註1 岡田正彦 指導主事 中央道通調査委員の調査による「諏訪市蒐神山遺跡土坑一八〇号跡は、長方形プランの土坑で銅形の内耳土器が正位

に置かれ、上の部分を別の銅形の内耳土器がかぶせてあつた。

2 宮下真澄「更新地方における中世石造塔の様式手法の推移について」『家談印書』巻一七—一〇

3 日野一郎「戸隠および周辺石造美術」戸隠 信濃毎日新聞社 昭和四八年八月二〇日

4 金井汲次「中野市吉田出土の蔵骨跡」高井第一〇号 昭和四四年二月一日

5 林茂樹・金井汲次・関孝一「中世・近世の墳墓調査」安曇寺・中野市教育委員会

6 田川幸生「穂積遺跡緊急発掘調査」穂積遺跡、資料裏の山道跡 中野市教育委員会 昭和四四年二月

7 金井汲次「田代向原遺跡」中野駒状地の考古資料 高井一九号 昭和四六年一月五日

8 日比野丈夫「長丘村出土古銅調査」下高井 長野県教育委員会 昭和二八年二月一日

9 赤星直忠「神奈川縣鎌倉市浄光明寺境内やぐら」日本考古学年報一一所収 昭和三年

第六節 須恵器片集積跡

所在した場所は草間部落の字茶臼峯一〇五一のイ番地にあたり、県道中野―豊野線の南側へ約四〇メートル登った小丘陵の中腹にあつて、茶臼峯塔跡から北西へ約一三〇メートルのところにあつた。地主の春原鉄郎氏が採土業である中野陸送会社に依頼して削取作業中の三月下旬に須恵器片が発見された。

中野市教委は、地主と業者に、暫く作業を中止してもらい、今回緊急発掘調査を実施したものである。ここは北側へ約二四〇〜三〇〇度の傾斜地で、良質の砂質粘土地帯であること。また、付近にはトンネル式無段登窯一基、半地下式無段登窯五基が点在すること等から窯跡の存在を想定していた。

二七日(土) 緊急発掘調査について蒲殿の打合せを済ませて調査にかかった。まず、伐採後の枝、倒木、木の株を片付け、落葉掻きをすませて表面採集を行った。一九点の遺物を得た。

二八日(日) ブルトーザによって遺物の発見された地点にシャベルを入れた。黒色土層の中に須恵器片が混在するような状態で検出されたが、窯跡の所在は確認できなかった。遺物は一三一点を得、このうち青海波文は小片であったが三点を検出した。

二九日(月) 昨日に引続き窯跡の確認を急いだ。夕方までに農道(津田マ五メートル)に沿って長二五メートル巾一五メートルの三七五平方メートルに及び発掘を終えたが、ついに窯跡を確認することはできなかった。表土(黒色)は三〇〜四〇センチ、第二層は六〇〜七〇センチの粘質褐色土で、第三層は地山の粘土層であった。遺物は、表土にのみ存在した。窯跡の存在しないことが判明したので、遺物の採集のみにとどめ調査は本日で終ることとした。

次に表面採集と、今回の調査によって検出された遺物二九六点を分類し、一覧表で提示したい。

これ等の遺物を類型によって分けると、坏類は一六%、甕類は僅か五%、甕類が大多数で七九%で、文様のあるものは三八%で無い

		表採	27日	28日	29日	計	
坏	片	5	4	9	10	28	
高台付	坏片	1	1	2	5	9	
蓋	片			2	7	9	
甕	頸部片	有文	1	2		3	
		無文	1	1		2	
	胴部片	有文			3	3	
		無文		1	1	1	3
底部	片		1	1	2		
甕(かめ)	頸部片	有文	1	7	3	11	
		無文	2	1	2	6	
	胴部片	有文	5	19	43	29	96
		無文	2	2	61	57	122
底部	片	1		1		2	
計		19	28	131	118	296	

備考 28日甕胴部破片に青海波文3片

ものは六二%であった。

次に遺物の概要について述べてたい。(第28回) (1)は坏の蓋片でつまみは扁平で低く灰青色を呈し、胎土焼成ともかなり良好のものである。この種の蓋片は、小片で八点を得た。(2)〜(4)は坏片で(4)は糸切底である。(5)は高台付片坏で口径は一センチのやや小振りのものであるが、黒青色を呈し、焼成のすぐれたものである。(6)〜(8)は甕の口縁片で、いずれも小片であるが、(6)だけは大片であった。



第28図 須恵器片集積跡出土遺物実測拓影図

03は大発肩部片で、頸部近くまで畳目文を浅く付し、比較的薄手のものである。胴部と頸部を接合した痕が内側に段となって明瞭に残っている。04は発片である。09の外側底部近くに胎土の垂れ下り痕が見られ、櫛状工具で調整のあとが見受け内側は刷毛文が薄く残っている。

次に発片の各種の代表的な文様を拓影によって示したものである。04は畳目文を胴の上端まで付し頸部近くに横走する条痕がある。

05-08までは薄手で、小型の発片であろう。09は畳目文を付した上を櫛状工具で横走させている。04は最も厚手の大発片で約二センチを算える。08は櫛状工具で波状文様を付し、この種のものは大発の頸部に多く見られるものである。04-08は内側に青海波文を付したもので04のみは外側は無文で、黒漆の自然釉がにじみ光沢がある。

遺物は青海波文三点を除いて他は同一期の窯業による所産で、大

久保七号窯跡のものと同類である。年代は八世紀末、すなわち平安時代初期のものである。三片の晋海波文は八世紀中葉の大久保六号（トンネル式無段登窯）のものが付近に撒布したものであろう。

緊急発表調査前の表採資料によって、窯尻または灰原にあたるのではあるまいかとし、半地下式無段登窯跡が所在するものと想定しての調査実施であったが、遺構の検出を見なかつたことについては、すでに述べたところである。

遺物の出土地は、クヌギ、ナラの雑木林の黒土層中で、遺物は木の株間に多く、動かされ、かつ、浮いた状態であった。この地域に

第三章 調査のまとめ

今回の茶臼釜遺跡の発掘調査は、西条カドニウム汚染田へ入れる土砂が、どうしてもこの遺跡付近でなくては求められなかつた。そのためやむを得ない発掘調査であった。しかも春先の田植の時期がせまっておき、発掘作業も急を要した。それに中世の碧の発掘の如きものは、信州の北端部では始めてとあって、その調査には相当の覚悟が必要であった。

しかしこの困難を乗り切ることのできたのも、市役所の教育委員会・農政課及び土地改良区の理解と、顧問の金井喜久一郎・金井波次岡先生の御指導があったからである。調査団を代表して関係各位に対して厚く御礼申し上げます。

おける従来の調査では、須恵器片と共に燃焼材の残片である木炭片、灰をはじめ焼土・窯滓の伴出を見ているが、今回はいずれも皆無であった。そこで須恵器片集積跡としたのである。集積跡とした原因については、農道の道下に構築されていたものと推定される窯跡が傾斜地であるために、土が落下し、須恵器片が露出していたものと思われ、それを草間区民が総出で、毎年春秋二回の道普請の折に雑木林中に捨てたものが堆積したものと思われる。

（金井正徳）

調査員も、各職場を持ちその仕事をしながら、研究に調査に手をつくした努力に、これまた敬意を表わしたい。特に高橋・岡調査員には、校務多忙中無理を顧って、発掘調査に助言をいただきました。調査に参加下さいました皆々様ご苦労様でした。

環境調査や発掘調査により得た成果は、各項にまとめられているが、ここでそれぞれの要点を示すならば次のようである。

出土遺物

(1) 原始 有柄石鏃(1)

(2) 古代 須恵器（窯跡関係を主とした遺物多数）・土器器底部(1)

・布目瓦（平瓦の一部）

(3) 中世 遺構

・岩（馬蹄形土器を持つ遺構・旗塚・曲輪状遺構）

遺物

・須恵質土器（壺(1) 羅鉢底部(1)）・土師質土器（カアラ
ヶ片多数・鍋形土器(1)

・陶器片(1)

・供養卒（宝篋印塔の笠の部分(1)五輪塔の地輪の部分(1)）

・火葬骨（八体分）・中国古銭（唐(1)・宋(2)・明(2)・不

明(2)）

・鉄器（角釘鉄片(1)）

・銃弾（鉛製銃）

(4) 近世

・古銭（寛永通宝(2)）

(5) 近代

・陶器(2)

・銅石(2)

・家畜骨（若干）

環境及び発掘調査の要点

原始時代から茶臼峯の周辺の高丘の丘陵には、多くの遺跡があり、人々の生活の場となっていた。それは中野市内に例をとってみても、遺跡数と分布においても、他を圧している。そのうちこの遺跡に近接する安原寺遺跡は、原始から近世にかけての遺構・遺物が発掘されている。このように高丘の丘陵は当地方の遺跡の宝庫でもある。

(1) 自然植生のなかで、原始時代は茶臼峯周辺でも狩猟が行なわれていた。

(2) 古代には、茶臼峯周辺で、土質・地形を生かし、斜面を利用して

窯業がさかんに行われている。附近には窯業跡群がある。

また、今回調査の遺跡からは、窯跡が発見されず、須恵器片の集積跡であった。

(3) 今回の調査は、中世後半の香遺構の発掘調査が主であった。その調査結果を環境と発掘の両面からスポットをあててみる。

○この丘陵の地形も起伏の変化がはげしく、自然の要害を持ち、中世後半のような戦乱のはげしい社会には、勝れた地形といえる。

○茶臼峯へは、中世中期頃、馬蹄形土器をもった岩が築かれた。岩には旗塚と、曲輪状遺構が附随している。

○岩のかこみの土塁上には、直立した杭状の櫓を作り、土塁のない東側へは、杭状の櫓を斜向状に並列している。

○土塁内は小建築物状のものをもうけたとみられ、特に北西部土塁附近を中心にピット群や金属の角釘が多数出土している。

○土塁構築後も必要に応じ、使用されたとみられる。それは戦国期以後の銃弾が、土塁附近から数個出土している。

○土塁は二度にわたって、一部分がくずされている。それは室町中期に南西の隅に火葬墓をもうけ、さらに戦国期以後において、北西の隅を切りくずして、供養卒を配置している。

○旗塚遺構は、中央に大きな柱状のものを立て、その回りに小ピットを作り、つり手の役目をたはしている。

○また曲輪状遺構は、土塁内東側の通路によってつながれ、関連を深めている。

○茶臼峯出土土器は世相を反映して、胎土が荒く美しさはあまりな

い、粗雑な作りである、須恵質土器においては、表面が荒れており、土師質土器はもろくて、ほとんど形状をとどめていない。

○中世後半は全国的にみても戦乱のたえない社会であつて、このことは中野周辺でもいえることである。最も関連性の深いのは、高梨氏及び草間氏の動向である。特に草間氏は、茶臼峯近辺の草間に長期にわたつて居住した、有力な地方豪族であつて、少なからず伝承も秘めている。

○出土した五輪塔・宝篋印塔と関連して、高丘丘陵には、中世後半の範疇にある、これらの供養塔の量がおびただしい。その数の全体は把握されていないが、中世の文化の跡をとどめている。

○附近にある城跡も、山上にあるいは平地に所在するのが八ヶ所に及び、寺院跡も数ヶ所に及ぶ。

○このように歴史的環境にすぐれ、遺跡が多く存在し、豊かな伝承

から中世史を総合的にまとめ、解明するの必要を感じる。今回の営は小規模な遺跡であつたが、さらに今後の調査の参考となれば幸である。

(4)江戸時代以後は、山林として果樹園・畑地として活用され、人々の作業の休けい場所ともなつている。さらに高丘丘陵の高所であるため、三角点として地理上の要地となつていた。

以上のような成果が一応示されるが、今回の調査は史資料が存在しても、その成果をまとめるための力が不足し、加えて報告書の期日もせまり、不十分なまゝとめになった点にはまことにほろろしい次第である。今後これらの史資料を、歴史学の立場から考察をしたり、考古学の面から再考したりして、生かされることを、研究者及び読者にお願ひ申し上げ、まごめのことばとしたい。

(田川 忠)

第1図 中野市西部を中心とした地図

